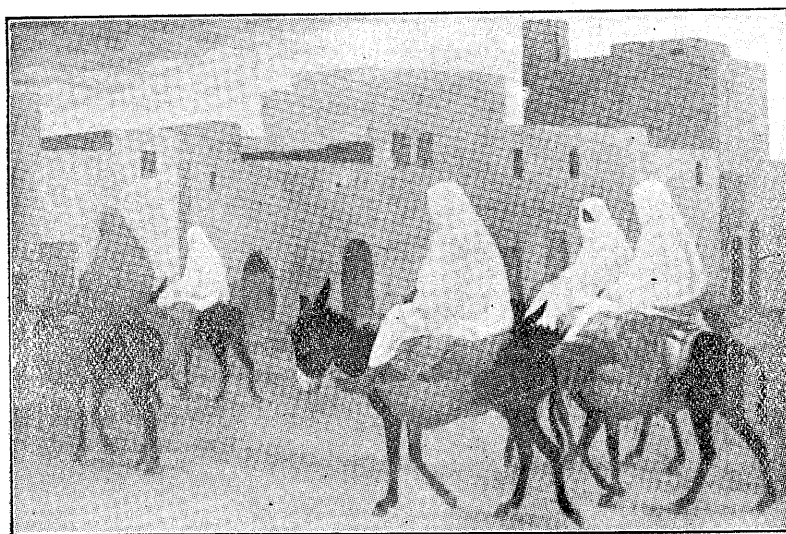


北辰會雜誌

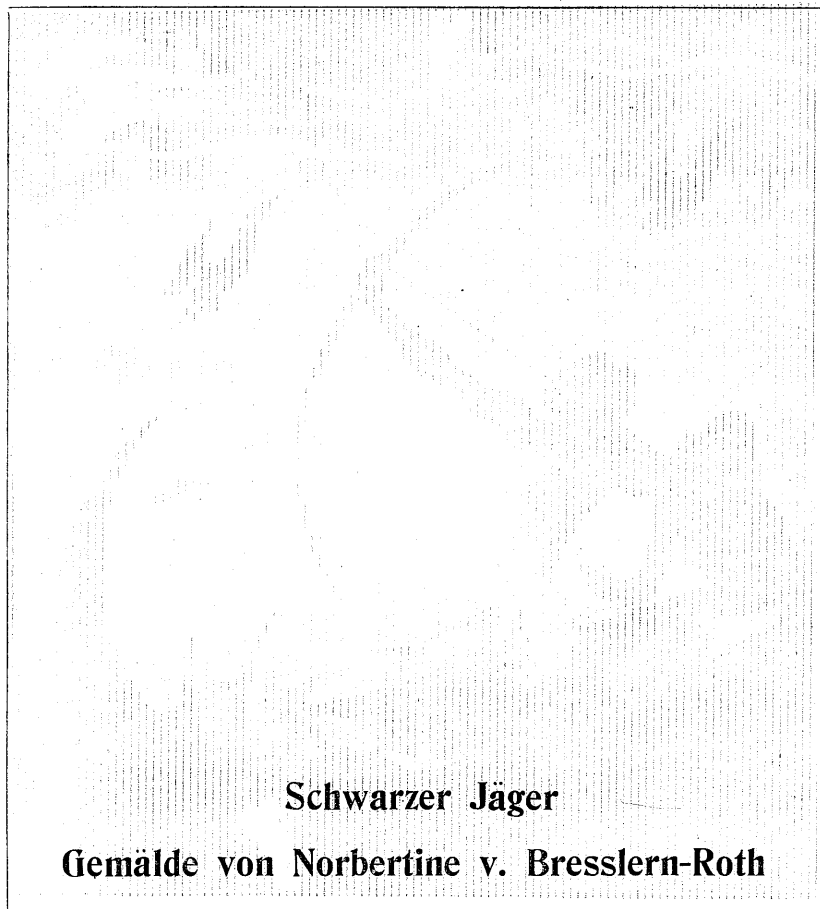
第百五十號



JULY MCMXXIX

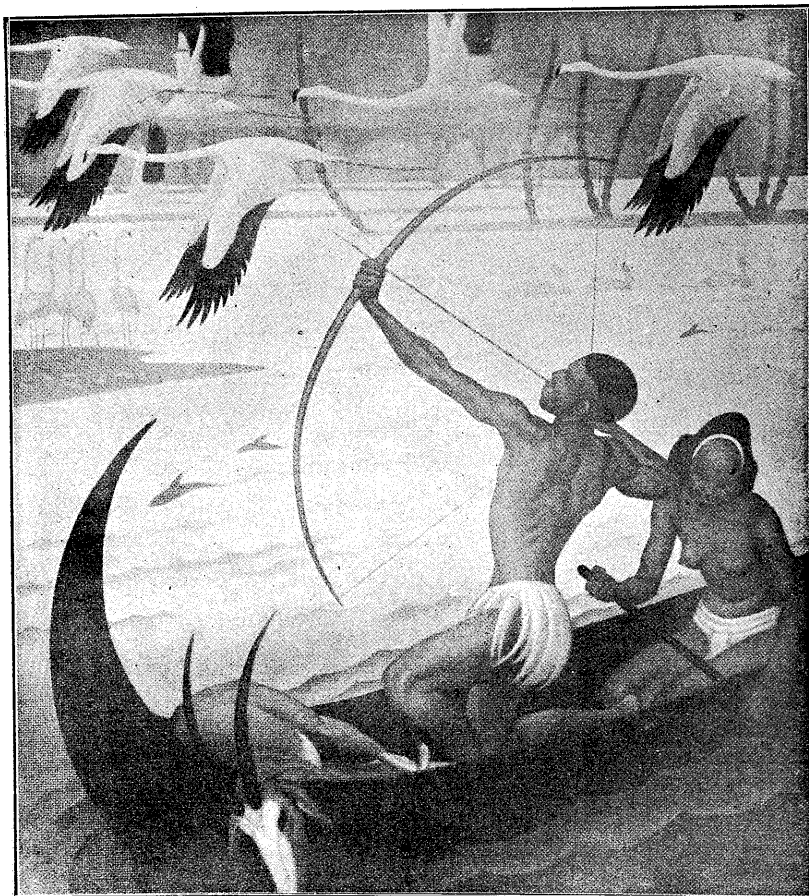
第四高等學校文藝部

第四高等學校北辰會雜誌
昭和四年六月十一日發行
第百五十號



Schwarzer Jäger

Gemälde von Norbertine v. Bresslern-Roth



Gemälde von Norbertine v. Breseleum-Roth
Schwarzer Jäger

表紙……………Morgensinnung

戯霧	菅 實
短歌會作品	同 谷
田園に生きる	上 西
季節 節	乙 村
灰色の断面	藤 井 義 夫
越路より房總への中より	本 田 友 重
砂に描く	大 竹 三 郎
或る友に	小 島 みのり
Arbeiter	内 田 倫 常
あ 男	吉 谷 仁 士
影	北 村 恭 孝
破られた幻想	釣 谷 武

雑誌……………みのる・うちだ・こまい・しみづ・みのり・おとむら
會 報

第四高等學校北辰會文藝部

北辰會雜誌

第百十五號

千九百二十九年六月版

戯曲 霧

菅 谷 實

時の政府の専斷と、特種の人々の名譽と体面とのために、跛者と蹇者^{けん}とから成立つた行列の婆羅的艦隊は、定められた墓地へ計畫された死滅を急ぐのだつた。

その悲惨な、最も残酷な旅の一夜、霧の深い晩のこと、艦隊は今、マダガスカル島に、やぶれがちな夢を結びながら、疲れきつた体を横へてゐる。前途なほ六千浬。熱帶の霧は深く闇を充して行手を鎖してゐる。

旗艦スワロフ號の後部艦橋上。S少佐、S大尉、B大尉、W大尉、公爵Z少尉、其他。

(此の劇は倦怠と疲勞に充ちてゐる鈍重な感じを表すために、なるべくゆつくり進行する)

幕が上ると、一面に霧が立罩めてゐて、何物も認められない。

S少佐がラダを昇つて来る。彼は毛布を横げ、空氣枕を出して速射砲に倚りかゝる。次第に朦朧と人影が見えて来る。

各自勝手な位置に、勝手な姿勢で睡眠を食つてゐる。

聲。 おうい。氣をつける。誰だ、おれを踏みつけたのは。

S少佐。 やあ、失敬。なにしろ暗くて分らないんだからな。蹴とばしたのかね。

聲。 なあに。さうでもないが、もう少しそつちへ寄つて呉れ。

S大尉。 ほう、君も來ましたね。

S少佐。 あゝ。とても暑くてね。それに、ひどい霧だ。舷窓^{スカットル}は一杯あいてたし、扇風器は全速力で廻つてゐたが、まるで蒸風呂の中で掻きまわされるやうだつた。僕は突然目を覺^さされた。殆んど呼吸^いがつまりさうになつたんだ。手足の自由は利かなくなつて、口を一ぱい開いて呼吸をしても、肺の中へ入つてくる空氣の量つたらほんの僅かだ。なんのことはない、陸^{をか}へあげられて砂の上でもがいてゐる魚のやうにね。そして頭がいたむ。まるでサモワールでもおつ冠^{かぶ}せられたやうに重くなつて、わくわく痛むんだ。やつと身体の自由をとりもどすと、僕は毛布と枕を抱へてとび出した。ところが、頭がぐら／＼して、ラダを昇るのが大變な骨折りだつた。

S大尉。 此處はどうやら凌げる。然し、枕はべつとり濡れて、これでは頭痛をひきおこすばかりだ。僕も空氣枕を持つてくるんだつた。

間

S 大尉。

なんといふ厭な天候だらう。北歐に棲む我々にとつては、この暑さが一番恐ろしいのだ。戦争が我を此處へつれて來たのでなかつたら、我々は完全に參つて了つたらうな。あの、石炭の粉が、熱い風と一緒に渦を卷いてゐる、地獄の谷よりも恐ろしい石炭積の作業にも耐え得られたのは全く不思議なことだ。そして我々は一萬二千哩航海したんだ。どうだ一萬二千哩だぜ。だが、あとの六千哩は無事にやれるかどうか。

S 少佐。

空は古綿を積み重ねたやうに低くたれ下つてゐる。果しない大洋の暗い沖から現はれて來る霧の群は、大軍がおし寄せるやうに、砲塔から司令塔を掠めて、再び暗闇へ消えてゆく。此の虫の匍ふのよりも鈍い、併し力強い前進は、何か恐ろしい事を暗示してゐるやうだ。力強い前進？ 何を馬鹿な。おれにはどうも、何か目に見えぬ力があつて、霧は無理矢理に動かされてゐるやうに見えるぞ。そして、その中に首をつ、込んで、なめくじのやうに光つてゐるマストや砲身は、中世紀の古城の廢墟に惡魔が棲んでゐるやうだ。氣味の悪い晩だな。

S 大尉。

陸の方から朽葉の嗅ひがやつて來て強く鼻をうつ。今夜は陸も魔物の棲家のやうに思はれる。此處には何の魅力も懷しさも感じない。露西亞のあの懐しい土の香をもう嗅ぐことも出來ないのだと思ふと、陸地を見るのが却つて苦痛だ。我々はもう運命の神に墓場を教へられてゐるんだ。

S 少佐。

あゝ。熱い。たまらん。墓へ入るんなら、驟雨でもやつて來て、もう少し樂にしてから入れて貰ひたいものだ。

S 大尉。

いや、もう我々は希望も慾望も凡てを奪はれて了つて、たゞ無茶苦茶に前進して、そして滅亡へと急がねばならないのです。本國の政府は愈々決心をしたのですねえ。最後に残つた有金をすつかり賭けて、一か八かといふところを。

S 少佐。

左様。然し、それが何だらう。ネボカトフ枝隊の増援ぢやないか。彼奴等は一体何を考へてゐるんだ。提督(ロヂエスト エレスキー)は、あのナワリンやドンスコイ等でさへ艦隊に編入するのを頑強に拒んだではないか。その上に、ニコライ一世、セニヤヴキン、モノコク、ウーシヤコフ、アブラキシンなどの古盟のやうなものをおし付けられちや、まるで手足を縛られて、さあ泳げと言はれるやうなものさ。

B 大尉。(しやがれ聲で)

畜生。みんな、こいつあ、K中佐のお蔭だぞ。彼奴はハル事件で、うま／＼と艦隊

を逃げ出して國際委員會へ派遣された事になつてゐるんだ。ふん、船の鼠はな、船が沈む前にはゐなくなるもんだ。實に惻巧な動物だからな。そして、のこ／＼本國へ行つて、何も知らん國民を騙しよる。お、諸君よ。今こそ我々が露西亞帝國のため、皇帝のために立つ時だぞ。今こそ全國民が覺醒しなければならんぞ。一瞬も躊躇するでない。余の言ふ事を信ぜよ。第一に軍艦を送れ。軍艦がなければ海戦は出來ないではないか。十八世紀に於いては浮砲台のクレムルさへ極東に派遣したではないか。我々には不可能といふことはない。勇進せよ、突進せよ。てな具合に煽動する。すると無智な國民は、何といふ貴い言葉だらう。この様な立派な軍人を疑ふのは國家に對する罪惡である、

と感激する。畜生。彼奴等は一体おれ達を、かんじんのおれ達をどうしてくれるんだい。

問

S 大尉。(突然) なんと言つてもね、我々の現在とつてゐる行動も一種の罪惡だね。

S 少佐。……だが——僕はかう考へてゐるんだが——若し反對の場合を考へて見たら、い、かね、我々が勝手に歸國する事を許されるとする。これは誰が考へても正しく露國艦隊の滅亡、いや消滅だ。そして同時に露西亞帝國の滅亡を意味するではないか。我々はもう定められた運命に甘んずるより他に仕方がないのだ。そして凡てを斷念めて犠牲の祭壇上に上るのだ。潔く上るんだ——ところで、若し君だけが歸國を許されるとする。やがて、我々の一部が萬一の機會に貴い責任を果して凱旋するだらう。その時君は果して如何なる良心にも咎められぬだらうか。又我々が全滅したとしても、君は平然としてゐられるか。

B 大尉。まあ、そんな事はあり得べき事ぢやないから、どうでも可いちやありませんか。

S 少佐。いや。さうではない。君は先刻有金を全部賭けるんだと言つたね。それだよ。若しやつてゐる中に負けさうになつて、いや確かに十の中八九まで負けることが分つたとしても、到底それは止められるものではないだらう。必ず財布を逆様にしても、着物をとられても最後まで頑張るに相違ない。は、は、。然し君、命まで奪られちや何にもなりませんね。そりや勝つかも知れませんが物事はうまく幸福にぶつ、かるものぢやない。それに不利益だと悟れば何をするか解らない連中ばかりだからな。そして一体戦争と賭博との間にどんな關係があらう。

B 大尉。

そうだ。そうだ。その方が論理的だぞ。だがセントペーターズブルグの海軍省内で安樂椅子に、ふんぞり返つてゐる英雄連に聞えたら大變だぞ。奴等は暴君だ。そして又盜賊のやうな奴等だ。奴等はデスクの上で、いんちきをやつてやがるんだ。尤もらしい面付をして地圖を眺めたり、戦術書を擴げたりしてさ。我々が失敗しても、勿論成功は到底望めんが、其時には奴等あ罪をおれ達に被せるにきまつざる。そして我々が彼等に與へる注告には一瞥も投げてくれない……。そして我々の名譽と功績は、みんな彼奴等に奪はれるのだ。

S 少佐。

それはセントペーターズブルグの英雄ばかりぢやないよ。此の艦隊の參謀幹部連だつてさうなんだ。彈丸の御馳走を一片も食つた事のないお坊ちやん連は、學校で教はつた通りの海戦を机の上でやつてゐる。そして我々が文句を言はうものなら肩を聳やかして答へるのだ。一九〇〇年のレワールに於ける實驗に基いて……だの、一九〇三年に於ける最高軍部會議に於てどうしたのつて責任を回避するのか、豪ぶるのかわかりやしない。旗色が悪いと見ると、そらあ君文書にかうあるんだ、もう極つたんだから仕様がな、なんて仕様のない事を吐く。露西亞では文書が神聖なんだからね。一片の紙片がなければ内火艇一つ動かないんだからね。

S 大尉。

いや僕が言ふのはそんな事ぢやないんだ。我々は今、生きながら棺に納められて墓場へ送られてゐるんだぜ。でなければ假死の状態にある人間を墓穴へ埋めつゝあるんだぜ。氣が付いた時にはもう

石の蓋がされて、泥をかけられてもう呼んでも、叫んでも、泣いても、喚いても駄目なんだ。どんなに暴れても其中で腐るんだ。僕等は晩かれ早かれ弾丸の破片で手をもがれ、足を裂かれながら死ぬんだ。幸ひ弾丸にあたらなくても艦の底や、ボートの顛覆した中で窒息するんだ。

W 大尉。そんなに君は死ぬ事に不平を言つたり文句を言つたりするんなら、どういふ風にして死ねばいいんだ。騎兵にでもなつて、聯隊旗を握りながら、弾丸に當つて死ぬのが一等いゝのかね。だがそんな事をしなくても、ピストルでずっと自殺したら可いぢやないか。戦争が始つたらやるんだ。そうぢやない。君等は死と死の前の苦痛とをこつちやにしてゐる。死その物は苦しいものぢやないよ。死んで了へば恐らく何の感も残るまいからね。だが死の前の苦しみは誰だつて除く譯にはい

かないだらう。それはそうと、今露西亞の若者が一萬人餘り何も知らないで屠殺場へ追立てられてゐるのだ。君等は知つてゐるが彼等には絶対に教へない。何も知らない無邪氣な羊を屠殺場へ追込んでゐるんだ。彼等を騙して殺すのは我々だぜ。然し我々の最後の日、最後の日に彼は何と言ふだらうか。我々は何と答へたらいいものか。

Z 少尉。その時は彼等に我々と一緒に死なねばならない事を告げるだけだよ。皇帝^{ツァー}の爲露西亞のにめに死ねと命令するだけだ。此事が善い事か悪い事かは神様がちやんと知つてゐらつしやる。

聲。(遠くで) あーあ。あー！

甲板を銃の床尾でコッコツ叩く音がする。

B 大尉。(英語で怒鳴る) こんな話は止める！ 衛兵が聴いさるぞ。

一同沈黙。間。此頃から沖の闇を貫いて電光が閃めく。初めは遙かの沖に光つてゐたが次第に近づいて来る。

S 大尉。(半ば眠つてゐる) 馬鹿な。こんな事を考へるのが間違つてゐるのかも知れん。

もう六千哩か。

もう六千哩だ。

僕等は屠殺場へ運ばれる羊だ。

自分ではどうする事も出来ない。ピストルもないのだ。

ゴロツチンに上つた佛蘭西の侯爵夫人^{マリーゼ}が一分間だけ刑の執行を猶豫してくれるやうに頼んださうだが……。僕等の生命はそんな美しい生命ではないのか。

僕等は羊でも侯爵でもないが、死ぬ事と同じだ。

だが死ぬためにわざ／＼極東へ出掛ける必要はどこにあるのだらうか。

電光！ 直ちに大雷鳴。瀧の様な驟雨^{シャワー}。

やがて上甲板に大勢の重い足どりが聞える。口々に驟雨だ驟雨だと叫ぶ聲がする。皆衣服を脱いで淡水浴を行ふ。甲板は混雑して大騒ぎである。

電光が一瞬間艦上を照すと、無数の人影が、或者は立つたり、或者は屈んだり、手を上にあげたり、擴げた

りしてゐる。

W 大尉。(艦載小蒸汽艇の上に裸体で立つてゐる) やあ、まるで夜中に幽霊たちが躍り狂つてゐるやうだ。ちやうどワルブルギスの夜と言つたところだね。

S 少佐。さうだ、さうだ。君はうまい事をいふね。そして君は一体何の役だい。

電光。雨の瀧。

W 大尉。勿論、僕はフアウストぢやないよ。だけど君、こうした時はメフキストフェレスだつて何だつて構やしない。驟雨^{シャワー}は一体誰がくれたのだ。いや、もう誰だつていゝぞ。有難い!

なほ電光と雷鳴。そして瀧。混乱の中に幕。

—— 一九二九年四月 ——

作者附記。

此の一篇は露國海軍中佐ウラヂミール、セミヨノフ氏の手記「ラスプラタ」の一節をとつて脚色したものである。

船幽霊のやうなバルチック艦隊は航海中毎日一隻か二隻の故障艦を發見する。それを修理するために全艦隊は速力をゆるめ、或ひは海上に危険な漂泊をも敢てせねばならぬ。中立國の港では虐待され追出されて大洋の真中で石炭積の冒險をもしなければならない。一日に百哩も航海出來たら成績は良い方だ。實に

リボウ出發から日本海に沈むまで劇的光景^{シーン}の連續である。之を聞くものは誰しもそれ〴〵異なる意味の深い感銘を受けるであらう。

私はこの一篇を目下構想中のもの、プロログとしたいと思つてゐたのですが、最近書きあげた戯曲「毀れた粘土細工」(本誌六號雜記に指してゐるのは此の作である)は作品の性質上殘念ながら掲載は不可能となつたので、その代りに「霧」を載せることにしたのである。この後は果して文字となつて完成出來るものかどうか之もバルチック艦隊のやうに心もとないものであるから、なんとも斷言出來ない。出來るだけ完成させたいものだ。然しこの一幕だけでも纏つたものだと思ふので取敢ず掲載したことを一寸お斷ります。

短歌會作品

花咲けど我に戀なし鈴蘭の白きをめでて春す
ぎにけり
小島 三徳

おそ秋の夕べの陽ざしあかりき汽車の煤煙^{けむり}
は芒に動きて
大竹 三郎

逝く春のこゝろもとなし木蓮の大い花びら風
なく散るに
乙 村 修

二つあまり庭のくぼみに落ちてある椿残して
たそがれにけり
水 上 一 久

春くればかの道のべのいさゝ川ゆく水つねに
藻をうかべつゝ
小島 三徳

安らけき^{すがた}貌に眠る幼な兒の延び行く心なほか
れといのる
大竹 三郎

汽車に過ぐる信濃高原^{たかはら}あさ明けて浅間の山の
雲に聳^そる見ゆ
乙 村 修

旅に來てわが身しみじみもとめたき心に遠く
ふるさどありぬ
小島 三徳

田園に生きる

上 西 繁

「お早うございます。卵を賣つて下さい」

元氣のいゝ、きびしくした少年の聲が裏口に聞かれた。僕は反射的に、

「おうい」

返事をして、漸く醒めかけてゐた意識を、現實に呼び戻した。重苦しい魂のかたまりがすーつと何處かへ抜け去つた。夫は夜の妖魔であつたかも知れない。

カーテンの隙から一條の光線がまぶしく兩眼を射た。

「あつ寝過ぎた」

と、瞬間に思つたが、すぐ其の考へは消えて、光のまぶしさに又目を瞑つて、網膜の調節をする爲、恐る恐る細々とあけた。

何と云ふ早い、氣紛れな光だ。もう遠慮して陰影——うすぐらい陰影のみを壁に残してゐたのだが部屋の中は何時もより明るかつた。確に何時もより、身体が生暖く、だるかつた。

「やつぱり晚いんだ」

さう感じながら、やつと頭を擡げて眼を睜つた。昨晚吸つた烟草の煙と、灰色の汚ない息が寢床ベッドの附近を、縫れ合つて匍つてゐた。

「今直ぐ来るから一寸待つて……」

少年は聞えぬらしく、口笛を吹いてゐた。

僕は起きやうともしないで、寢たまゝ手を伸ばして枕元の机上の置鏡をとつて、先づ自分の寢惚けさ加減をみた。

赤くごろんとした眸が膨ればつたい眼險の奥に鈍く動いた。青白い頬の肉はむくんで凝集力を失つたのか、引張るとぶよぶよした。

寢覺めざめの面の醜い事が今更はつきり見せつけられて、不快になつたが、大急ぎで、無暗に顔面神経を緊張させて、劔劇俳優の表情を試み、人間に逢へる丈、自信のある顔をつくらうとて立上つた。

ものぐさな瑠璃子はあちらを向いて、寢たふりをしてゐた、毛布の上にはみ出してゐる白いうなじが微に痙攣する度に、おかつばがさらさら波をゆりわけてゐる。

「奴寒いんだ」

と思つたが、僕は折角寢たふりしてゐる彼女の氣持をぶちこはさぬ爲に、思ひかへして、そつと扉を開けて裏口へ出た。

「馬鹿に早いね、さう、いくつ？」

「十下さい」

「それ十だよ」

蜜柑箱の米ぬかの中から、ごそ／＼抜きとつて、勘定し、新聞にくるんで渡した。

「はいたしかに」

少年は受取つてから、米袋を差出した。(こゝで断つておくが、僕達は半分物々交換をやつてゐたんだ)

鶏屋では、もうばた／＼きやあ／＼生存競争を賑しくやつてゐる。朝寝をした悔恨の情と、小さい動物への本能的愛着心が無意識に湧き起つて來た。むつとする鶏屋特有の臭ひ、母親が嬰兒の襁褓おむつを變へる時の様な、軽い麻痺的興奮を感じながら戸を開けた。

お尻をつ、かれ、狂人の様にかけまはるのや接吻する様に、お互に立上つて、嘴を突き合ひ、他愛ないダンスをやつてゐるのが、次から次へと出て來る。その中に七面鳥が超然として、嚴かに歩き廻つてゐた。そして僕を認めるや、シャ／＼急に羽を擴げて、ガク／＼と首を前の方に引き伸ばして、奇聲を發し挑戦して來た。次の部屋では臆病者の兎がせ、こましく、水を呑んでゐたが、僕が入ると、こそ／＼ねぐらへ入つて行つた。ほろ／＼鳥のあはて者、獨身の山羊、病鶏と、一と廻りしてから、ほつと一安心して鶏屋を出た。

チロ／＼小川の流れば、無表情に續いてゐた。上手のつきや(水車小屋)も、悠長に、水を受けては、ギーゴツトンを繰返してゐた。然し其の單調な音律の中に、言知れぬ田園情調の味ひが聞き取られた。僕はちつ

と、空を見上げた。

×

×

×

「瑠璃どうした、お天道様が笑つてゐるぞ」

僕はとう／＼疳癪かんじやくを起して窓を叩いた。

「もうどつくに起きてゐるわよ」

「起きたんなら、カーテンをあげたらいい、ちやないか」

「ハイ／＼どうもすみません」

然しどうも怪しいので、裏口から入つて、寢室のドアを開け様とすると、

「いけません、ちよつと待つて、」

僕は瑠璃が大あはてで、ベッドを降りてドレスを着換へるのを想像して、嘖き出したくなつた。が、

「早くしろ」

怒つてみせた。

彼女は、ものも言はないで、ドアの把手を引張り、そつとあけ、その隙間から、僕のルバシユカの作業服を細帯にクル／＼捲くつたまゝ、ニュツと突き出した。

圓ぼつちい、可愛らしい手がおとなしく引込んだ。

僕は「ワツ」と戸を開けて入つて、彼女を怒らせてみたい、いつもの惡戯な衝動を感じたが、やり場に困り、

仕方なしに、表口の玄關番の犬の處へ銚先を向けた。

「ピー！ピー！ ウツシ！ ウツシ！」

ピーは狒奴の小屋から飛び出して來た。一年も逢はなかつた様に、氣が狂つてゐる程、ジャンプしたり、巾飛したり、トードダンスをしたり、僕の眼前に歓迎の挨拶をした。夫だけならいゝが、足を嘗めるのが一番ぞつとする。

「あんだ、何してらつしやる？ 鶏が死んじやうじやありませんか」

瑠璃は漸く寢室を引拂つて、玄關へ出た。そして、僕その他愛ない有様を見て、

「まあホ、、、」

「お早う、支度はどうだい」

「ルバシカは」

忘れてゐた。犬に氣を取られて、改めて妻の前でナイトガウンを脱いで、仕事着に着換へた。瑠璃の輝かしい眸が、ちつと僕のさうした動作を優しく、見つめてゐた。白い靴下が僕の眼前に佇立してゐた。總てフ라우の靴下には、男は神聖な氣持を抱くもんだ。

おかつばさんの下手なハタキ躍り——お掃除が初つた。

「何時もより叩き様が荒いぞ」

「今日は、何だか元氣があつてよ」

「嬉しい事があるのかい」

「え、さうよ」

「俺の事かい」

「アラホ、、、。自惚れたらいけないわ」

「まあ俺の事にしてをかう」

やがて僕も可愛い、動物相手の商賣を初めなければならなかつた。

さうだ死んぢやうであらう所の鶏だ。

x x x

ピー竈の汽笛が一秒五百位の波音を以て、金切聲をあげる頃、僕の腹もきゅーつとなつて來たので、作業服のまゝ、食堂へ入つて行つた。朝の神聖なる會見と食事が僕を待つてゐた。

「お嬢さん、お早う」

「ちつ、馬鹿にしてゐるわよ、お互様にお早う」

「あゝ、僕達は、近頃怠けて來たね、見るこの卵の營養不良なのを」

ポケットから營養不良の見本をとり出してから沈痛な聲を絞つた。

「夜更しなさるからよ」

「おまへだつて、俺より遅いぢやないか？」

「は、かり様、もう明日の晩から、トランプの御相手は御免蒙りませう」
「ば、莫迦な」

「ホ、。ちやトランプもやめられないんでしたら、其上に朝起きが誓へますか」

「うん誓ふよ、誓へるよ。能率をあげるさ、然しおまへ、今朝は一体どうしたんだ」

「今朝のことなんか………勘忍して頂戴ね」

「ことなんかつてやつがあるか」

氣紛れな營養不良の見本の卵はコトんど、板の間へ落ちて、ころがつて行つた。彼女はあつけにとられてゐたが、急ににくくした。石で作つた手品の種は醜く、二人を嘲笑つてゐる様な氣がした。然し二人の心は穏やかたつた。總てが洗ひ去られた。

「明日からお互に早く起きやう」

「え、」

彼女は輝かしい未來を思ふ様な微笑を投げかけて、僕の逞しい腕首を接吻した。

x

x

x

次の日、此の都に遠いA村の文化バラックへ、K高校の一學生が訪れた。僕の従弟だつた。

「いよう、待つてゐた。よく來たね。手紙で書いてよこしたより、少し早かつたじゃないか」

「うん何しろ試験がすんでから、すぐ飛び出して來たんだ。實際學生生活も、よし、わるしだ」

「夫で僕等のホームへ、夢中になつて、やつて來たんだな」

「さう。矢張田舎に限る。土にかへれつて、言ふがなあ、で瑠璃さんは」

「達者だよ」

僕は友達であり、又實の兄である様な、軽い氣持で、此の純情な青年の肩に手をかけて、表口へ進み、ドアをコツ／＼叩いた。

ハニカミ屋の瑠璃は全くお嬢さんお嬢さんの様に、（話聲で彼と察してか）赤い顔して出て來て、

「アラ………」

無言で頭を一寸垂れた。

「ば、ばく彰です。どうも早く來まして」

やつとこれ丈の事を言つて、ぼつと彼も上氣した。そしてその應援を求める様な眼付が、僕に向けられた。

「随分お待ちしてゐましたわ、お手紙で知つてはゐましたが、あなたが良人うちの」

かう言つて、おかつばの後れ毛を掻きあげて苺の様にほてる頬を手の裏で冷した。

「なんでございますの？ 初めまして」

慣れない挨拶だ。

「さうだよ。ま、そんな事はあとでよし。兎に角疲れたらう。瑠璃！ ぼんやりしてゐないで總ての用意だ。わかつたかい」

彼女は言はれて、急にそはくして奥へ入つて行つた。

あはたらしい生活が初まつた。僕と瑠璃は急に長い間の倦怠から救はれたのだつた。

又、都離れた田園に近代のジャズ的生活から逃避してゐる處から来る、鬱憤の爆發だつたかも知れない。手品の卵の事件があつてから数日のことだ、三人の間には表面何等蟠がなかつた。又あつてはならなかつた。然し目に見えない反逆心が各自の心に運き初めてゐた。少くとも、自分だけはさう思はれた。

時々訪れて来る、町からの商人、村人を除いて外に、三人の話しかける人はゐなかつたので、段々と各自の間の感情が濃くなり、遂には、相手の心の領域に迄侵して行つた。

夜だ。晝は小川へ魚釣に行つたり、山羊をひっぱりまはしてゐたりした彼の若々しい姿が、試験の辛さも忘れて、トランプに、あの約束のトランプに、夢中になつてゐるのを見ると、僕は祝福したい様な、又惱ましい様な氣持になつた。

「僕も入れてくれ」

「待つてゐらつしやいつたら」

「何がそんなにいらだ、しいんだい。旗色が悪いと見えるね」

「……………」

「あんた、するいわ」

「だつて、こいつが切手だい」

「あら、さう」

ルリの奴、變な目をした。そして全身の姿勢が、僕を不快にさせるに充分であり、彼の神経をエクサイトするに充分であつた。

僕の肅嚴な眼光は彼女をはつとさせた。

氣まづい沈黙……………」

然し、僕の太い心は、だん／＼やはらいで、むしろ、彼女が憐れに感ぜられた。何もかも自分のせいに歸してしまへば罰は神が消して呉れるだらう。

冷たい月の光が、硝子窓を通して、さし込んで來た。瑠璃の額が青白く光つてゐる。二三本の鬢のはづれが睫毛に届いて、弧形を畫いた。その陰影が、たまらなく憂愁な氣分を唆つた。

x x x

久しぶりで、珍らしい人の接待に、若い人妻らしい軽い興奮の後の、満足感が、彼女を熟寢に導いたらしく、唯もう、スウ／＼飽く迄マドモアゼルの様に眠つてゐた。

彰もどうやら寢入つたらしかつた。

寢床兼客間の此部屋に、僕はトランプをすまして、三人一緒にベッドへ飛び込んでから、眼が冴えて眠れないまゝに、かうして靜なる凝視に落ちて行つた。そして考へてならない事を、知らず知らずの間に考へてゐた。夫は過去の去り難い事象の再現を齎した、最も秘められた心の嘆きであつた。

「瑠璃、許してくれ、僕がこんな浅ましい嫉妬をするなんて、夫やおまへが、さうして、精神的に、おまへの心にびつたり合つた、友達……」を心に欲求してゐるのは無理もない事だ。けどなあ、僕は夫がたえられない程淋しい、又にくらしいんだ。僕は思ひきつておまへをた、きつけてやりたい。そしておしまひには、おまへが泣きしやくつた時、おまへの膝を抱いて、哀願したい。そしたら俺の心も満足するかも知れない。

x x x

今迄、いや之からも、やつぱりさうかも知れないが、いくら僕がおまへを力一杯抱きしめても、僕の心は、ひとりでに、淋しさに浸つてゐた。そして勝手に嫉妬の材料を拵へて、妄想してゐた。夫はおまへが美しいからぢやなくて、僕はおまへに、をいて行かれさうな気がしたからだ。

彰が……え、そんな事はあるまい。絶対にあつてはならない。おまへは俺の何だ。フラウ……マドモアゼル……。さあそのまゝ、眼を覺まさないでゐてくれ。もう考へまい。二人は永劫に結びついてゐるべきだ。決して舊道徳ではなしに、今こそ俺の愛の力を見せてやるぞ」

x x x

僕は彼女の、はねのけられさうになつた毛布を、そつと上へ摺り上げて、かぶせた。此世の最も悲慘な出来事を未前に防ぎたいのでもあつた……。

二重眼瞼が、そつと開いて、微かに安心した様に、うるんだ眸が夢を追ふて、(僕のやるせない氣持を、残したまゝ、)閉ぢられた。

x x x

お、嫉妬！世の中の男の凡てに對する嫉妬は僕の心を歪めてしまつた。田園に拳鶏をして生きる、夫はかくも、果てしない愛の闘争を忌避する爲だつたのに。

こんな事を思つてゐたが、覺めた意識は現實の物体をとらへた。テーブル上の「養鶏の日本」を。

卓上電燈の青い光は無能の男を嘲笑つて、無味乾燥な活字を照した。

犬の奴がクン／＼泣いてゐる。あいつも淋しいと見える。

男と女は永遠に結びついてゐる様で、又離れてゐる様で、不可思議なものだ。最初の人間——男女一体の人間が神に依て二人に引き裂かれてから、お互に相手を探し求め、離れまいとすると言はれてゐるが。

「養鶏の日本」も興味がないので、わきへのけて、卵繪の内職を初めた。

卵の中味をとつて、鋸屑をつめこみ、之に箸を通し、把手にする。之を左手に持て、右手で、卵の白い表に、グロテスクな人魚の繪や、人面獅身像そつちのけの、怪物を特別な繪具で書くのである。物好きな人が買つてくれるのだつた。

僕の緊張した異様に輝く眼光の下に、卵の小さい畫布が、嫉妬と憎悪と愛情と平和を——人生の縮圖を背景に、何ものか神秘なものに彩られて行つた。田園の文化バラックの中の夜にしては、あまりに穩かでない事實にしても、誰が此の僕の生活を否定出來やう。

僕はかくして生きるんだ。何ごとをも、この生活以外の事は、すべて抹殺して。——一九二九・五・六——

季 節

乙 村 修

若葉のかげの喫茶店の軽い椅子にすわると
 ジャン・コクトオに似た白服のボーイさんがアイス・クリームをさし出した。

— May 1929 —

日本海と青ぞら

立ちどまつて青空を見てゐたぼくは、自分が若い水兵であるかのやうに感じはじめた。だから、だぶだぶのつぼんの裾で街の敷石道をかるやかに蹴つて歩き出した。ふと、口笛にのぼつた曲は、*日本海と青ぞら*。
 すんすん進んで行くうちに、ぼくは自分の乗り組むでゐる船の在り處も知らないでゐることに氣附いたのだ。と、その時、どうしたわけか *Seeschlacht : Reinhart Goering* と云ふ文字が頭に浮んで來た。そしてすぐ、ぼくは、もういちど立ちどまつて仰いだ青空に *Skager Rack* の沖をゆく戦艦の砲塔内の七人の水兵のすがたをありくゝを見た。その中のひとりに、あつ！ このぼくがあることをはつきりを見た。

千九百二十九年五月二十七日（街では軒ごとに國旗を掲げてゐる。そして、今日は海軍記念日だと云ふのであつた。）

灰色の断面

藤井義夫

上京

さようなら、母よ、妹よ、弟よ、
故郷の驛のシグナルの灯よ。

まつ白に雪にうもれた北國の城下の町よ、
さよなら、さよなら。

何かなし、思はぬことのおきるよな
心もとなき、ふるさとを出る。

あてもなく乗った電車を終点で降りて、
あてなくまた街をゆく。

夜が來たらどこでねむらう——公園の
ベンチに冬の日かげがかげる。

ともかくも幸福さうな顔をして、
夜の銀座の人にまじった。

犬でさえ仕合せさうに道端の日向の春に
ねころんでゐる。

工事場の晝の休みを長々と積木の上に
ねてる人たち。

臨時雇にやつとありつけたうれしさに
花など買つてかへる日のくれ。

主任から何か叱言をくつてゐる四十男の
靴は汚れて。

あちこちで上る煙草のけむの中に
事務につかれた顔が浮いてる。

どうかかうか食ふ道だけはついたよだ、
三疊の部屋に長々とねそべる。

歸郷

いつかまた逢はうよ人よ、東京よ。
暗い短い春だつたなあ。

おれひとりゐなくならうが、東京は
やはり明るく若々しかる。

何もかも忘れて寝よう、強ひて眼を
つむる夜汽車の窓の冷たさ。

越路より房總への中より

本田友重

仰ぎみる淺間が嶽の雲ひくく煙も見えぬ佐久
の平や

歌人の胸に抱かれし千曲川流れのひびき我は
今きく

松たかき甚兵衛渡しに風おちて照る日かゝや
くその印旛沼

陽のおつる印旛が沼は静かにてあけに色どる
城趾の松

砂に描く

大竹三郎

大いなる古城のいらいかめしき仰げば遠く
悲しみ湧きぬ

逝く秋のうれひはこゝに芒ばなあきつとまり
て夕ぐれにけり

今日よりは父なき三たりの母として姉よ、そ
の名に白き幸あれ

泣けとかや柳けぶりぬ川岸の馬頭の塚にしぐ
る夕べを

風鈴の音に涼しく黄昏れて青桐のすゑ星一つ
見ゆ

グラウンドの新土ふみて陽に立てば心敬虔に
希望は湧きぬ

或友に

小島みのり

人遠く我にはなれて群をくむくみて寂しき一
人なりけり

友情も思想のごとし年ふれば異なる意味をも
ちにけるかな

友情と思想と我にみながらを示し去りにし人
を忘れず

疑はおのれをつよく見せむためおこるものぞ
と思へばやみぬ

なす事のはじめは黙せなる事の終りを我は待
ちてありなむ

雜 詠

春くれば淀の水車の水の音も遠く親しき田舎
なりけり
窓遠く富士焼くるかも室咲むろさきの花に親しみ静か
なるころ
手に入りしものと思へば氣は安し猫のごとく
に仕事を見つむ
やまひなきわが身明るし山深く若葉の道に聞
くほどゝぎす
丸ビルに消ゆる灯あはれ高樓のものともなら
ず上る月かな
かぞにはふ こうたきこめし まらうどの
きぬにかもにし しらうめのはな

LEPRAを憐れむ

大河の橋のたもとにレプラ親子昨日も今日も
雨の佗たびしき
悩むともなれにこそすべき人はあらじ缺けし手
をのべ錢をこふとき
レプラ レプラなれも人なりなほ強く我に錢
をばこひみてまほし
抱く子も同じさだめとなりぬべしその子よ育
みてかひなきあはれ
友も又施しやりて呉れたれば人の身我れはう
れしかりけり
河の水夕ざりすめばその水になれもすみゆく
血を戀ふらむか

Arbeiter

内田 倫 常

あの泥の様な顔と
節だらけの腕を見ろ
社會の平和が踊つてゐるじやないか

5. 1. 29

六月を歌ふ

微風のそよぐ
六月の郊外
人々は都市の雑塵を忘れた
土に蠢めく農民の純朴さが
彼等から
マルクスを奪ひ去つた

麗しい純情の炎熱が
僅かでもよいから
都市民^{シビラン}住者達を蝕んで呉れ

9. 1. 29

Schlechtes Geschmack

ふらんくふると あむ まいん
何と響きのよいリズムを持つてゐるんだらう
燦とした文華の咲く——
憶出^{おもひで}の街
シラーが生れた
犀麻河畔の金澤市
何ていやなゴツサだらう

9. 9. 26

あ　る　男

吉　谷　仁　士

〔一〕

北信州の春は未だ淋しい。

小山の南側の土堤に、赤黒い土が春の喜びを轟かさうとした所で、鳥も啼かず、木も萌えず、小川の春の私語すらも未だ始められない。

此の赤黒い土でさへしつとりと、まるで失戀者の涙の様に濡れてゐる。

梢の赤い松林の中を掘り割つた谷街道が続いて、右手から延びた村にかくれてゐる。

人一人通らない夕暮を彼れの橋は走つて行つた。

當ても無い旅人が雪のシベリヤの高原を走つて行く様に、枯れた桑の木の永く續いた雪の野を橋は尙も冷たく走つて行つた。

雪國の夕暮に獨特なあの底冷えのする大氣と、春とは云へ直ぐ頭の上迄落ち掛つてゐる薄暗い雲とは、此れと似合な彼の蒼白な頬と、冷え切つた唇に押し迫つて来る。

橋は愈々村に入つて行つた。屑をなして迫つて来る様な夕暮の中に、ずつと突き立つた高社山を背にして、村の燈火が見え初めた。

彼は力なく眼を開くと、息苦しい周圍の中に痛ましい過去を追想して行つた。

今私の橋は呪の爲めに走つて行く。

私は戀をしたのだ。罪惡を（私は左様思つてゐたのだ。）犯してしまつたのだ。

私は彼女に手紙を送つたのだ。其の一週間の私の元氣はどれ程だつたらう。罪の爲めに喜びの爲めに、否彼女の返事の爲めに、戀する者の誰れもの様に、不安と歡喜の中に私は震へてゐたのだ。

而も手紙は遂々來なかつたのだ。

私は失神した様に、血生臭い昔を物語る城下町の夜をどれ程歩き廻つたらう。崩れ落ちた土塀の小路を濕つた土を踏みながら、ジュズを提げて當もなく祈つた。

私は彼女を信じてゐた。而も其の後から絶えず不安が迫つて來て、耐へられない愁しさが離れた事はない。其の間に又しても、あの止めどもない軽い咳と定まらない熱が私をおそつて來た。

時雨降るあの日、異様な胸の痛みと喉の溫もりと共に赤黒い血を机の上に吐き出した時、行く手も何も全く見えなくなつて、死の惡魔が直ぐ眼の前に攻めつけて來ると、悶いても、泣いても、どうにもならない焦燥で私は血にまみれた手で胸を裂けるばかりに掻きむしつた。

どれ丈時間が経つたのか、どれ丈掻きむしつたのか……。

私は遂に病院の幾日かを送らねばならなくなつてゐた。

あの飾り一つ無い赤茶色の壁と幾人もの死の涙を吸つた。赤黒い濕つた疊にかこまれた室に立ち込めた死人の息づきの様な、臭氣の中に、光もなくまして希望も無く失神した様に横たへられた時、どれ程神を罵つたらう、どれ程神を呪つたらう。

「幸福なる者以外に何故祝福をもたらないのだ。私の魔の手の前に何處に神が有るのだ、神は幸福にのみ味方する悪魔だ、良いかげんに神を認めて來た私は、神に欺かれた。骨と皮以外に何物も恵まれない動物なのだ」

其の夜私の側に附き切つて居てくれた母の顔すらも冷たい神の悪戯としか見えなかつた。

夜のとばりは既に下ろされて、ずつと擴げられた暗の中に、凍り附いた雪の上を、キーツと異様な音を立て、櫓は尙も冷たい彼れの体をのせて走つて行つた。

彼れは尙も其の幻を追つて行つた。

其の翌日の事だつた。

冬の晴れ切つた朝の空は強い青に透き通つて晴れやかな陽が硝子窓を通して室に射し込んで來た。私が何かしら息若しい程に胸を壓へつけられて目を開くと、私が其の時迄一瞬時も忘れなかつた、彼女が母と話し

てゐるのを見た。あの意地悪い迄にしつかりと結ばれた口と、硝子の様な光りを持つた目の彼女が今私の前で話してゐる。

母は私が目を開いたのを見ると急いで側に來て顔を洗つてくれた。彼女は黙つて私に目禮をした。私は今彼女の前に居ると云ふ嬉しさで起き上らうとしたが、起き上る力もなくそのまゝ彼女に禮をかへした。

母が洗ひ終へた湯を捨てに立つと彼女は靜かに私の側に坐つて、腋の下に檢溫器を差し挟むと手を取つて脈を見初めた。

上氣した眼を伏せて彼女は云つた。

「小杉さん、御手紙有難う御座いました。何も云はないでね。」

彼女の手はまるで中毒者の様に震へてゐる。

母の歸つて來る音が廊下になると、彼女は腕時計を見初めた。さうして私の手を取り直した。私の心臓の鼓動は胸から腕に腕から彼女の震へる指先に傳はつて、其れと共に猛烈な勢で私の血が彼女の胸に流れ込んで、病に汚れた黒ずんだ血が清い血に混ると、再び私の胸に流れ返つて來るかと思はれる程の胸の高鳴りを私は壓へられなかつた。

「有難う」

此れ丈答へると、私は魂の抜けた人の様に室も無く世界も無くなつて歡喜の内に震へてゐた。

母が入つて來ると、彼女は檢溫器を取り出して、

「七度一寸御座います。御大事に」

さう母に告げると禮をして出て行つた。

彼れの橋は村を通り抜けると病院のある次の村との境に架けられた橋の上を走つて行つた。

雪にうづもれた河原の中をズット一條の流れが星一つない闇から流れ出て又闇の中に消えて行つて、凍り附く様な響が絶えず橋の音に混つて聞えて來た。

若しも人間に何物をも選擇し又取捨する方と誤まらない先見が與へられるならば、私は彼女から去る可きであつたのだ。

黙つた美しい戀の中に安らかな生の歩みを續けて行く可きであつた。

美しい彼女を信じてそのまゝ走つて行く。本當に詩であつたのだ。

而も運命は皮肉だ。それから私に續いて來たものは何んだ。

私の退院が訪づれて來た二年前の物狂はしい夜、

其の日も彼女は私の室に、

「小杉さん入つてもいい、」

さう云つて入つて來た。

私は、私が此處を去つたら、彼女はもう遠のいてしまうのだ。あの優しい心の中からどうしてあんな嚴肅な光が流れ出るかと思はれる様な光が私を引き離してしまふのだと思ふと何も彼も解らなくなつてしまつた。放たれた野火の様に燃えた私の心はもう何も彼も焼き盡さないではゐなかつた。

彼女は目に涙を一ぱいためて黙つて私を見つめてゐた。

ふと私は其に打ちのめされるやうに倒れると、自分の恐しい心をまぎ／＼と見せつけられて涙がこめどもなく流れ出た。さうして其の涙に濡れた疊を前後もなく掻きむしつた。

靜かな而も嵐をひかへた様な闇の中に尙も追想して行つた。夏が來て秋が來た。

其の間私はどれ程自分を悲しく思つたか、どれ程彼女に對する態度を謝らうとしたか。私は遂に私のぶしつけな行ひの許しを乞ふ手紙をあらゆる恥をしのんで出したのだ。

其の返事として此の手紙を受け取つた。

「小杉様、御久しう御座います。」

お別れしてからもう何時の間にか秋になつてしまひました。あなたが大變良くおなりになつてから、一諸に二階の西窓で五嶽の彼方に沈んで行く夕陽を眺めながら、まだ雪の消え残つた山の名を教へていただいたのを今だに忘れません。

私本當に唯一人で入陽の空を見る事がすきですの。
今日も夕陽を眺めました。

紅葉に榮えた五嶽の前に黒ずんだ千曲川が流れ様ともせず、よごんで見えます。すーッと力ない光が大空に流れて町や村の屋根をかすめて、其れが消えると、裏山の紅葉が一度に榮えた様にしばらく暗くなつて行く町や村に反映して、やがて谷や麓から灰色のとばりが廣がり初めると、最後の誇を投げ捨てた様に山々がとばりの中に消えて行つてしまひました。

い、え私は泣きませぬ。

毎日々々泣いて苦しんで、もつとく死んで歸つて行く人々の中に、涙もなくなつて生きてをりますもの。私はあなたを愛してをります。

あなたが何をお思ひになつたとしても、それはあなた自身の御心であつたとは思ひません。ではこれでお別れ致します。

小 杉 様

雪 子 より

いくたび夢の様に繰り返して讀んだであらう。

底知れない彼女の氣高さに比べて私の見惡さを思ふと、いくら自分を見下げ盡しても尙足りなかつた。

私程幸福な人間があらうか。彼女は女神だ、あの神秘な彼女の心から響いて來た聲の何んと美しいことだ。

彼女の幻が常に目の前に浮んで、私はも早何も見なかつた。

私は再び彼女に手紙を送つた。

あなたは私の女神だ。

氣高い女神の前に坐つてゐる以外に私にはもう何も解らない。

救ひ主の爲めに血も心も全く與へ盡さう。

とも書いた。

何故世の中に運命があるのだらう。

私が此の手紙を出して一ヶ月、冬が來ても彼女からは何んの便りも來なかつた。

私は又しても手紙を送つたのだ。

而も其後二週間經ち三週間しても遂に返事は來なかつた。

けれ共私は信じ様とした「明日こそは」

さう思つて手紙を待つてゐた。

考へる元氣すらも失せて私は再び一ヶ月の間待ち通した。

信じてゐた物が失せると、其の後に残された物は空虚以外には無い。いくら目を見張つても手に觸れ舌に

感じて、果しない砂漠と其砂以外に何物もない。色も味もない。淋しいと云ふには餘りも悲しかった。

「賣女奴!!」

奴は俺が恐しいんだ。

私は彼女の手紙を八つぎきすると疊の上に投げつけた。

肺病が恐しいのか。黒い血が恐しいのか。

私は第四回目の手紙を送った。

「冷たい女神よ!! 否賣女よ!!」

私は愚にも今が今迄君を信じてゐたのだ。

血が恐しいのだらう、咯血が恐しいのだらう。それとも此の俺の血に不足なのか。俺の心臓を突き破つて噴き出す口にしつかりと口を當て、見ろ。

虫に食ひ盡された体だ。思ふ丈の血はなくとも誰にも劣らない熱がある。

何千貫の重さも噴き上げるに十分な力がある。

賣女奴!! 何がかしい!!」

此れ文書き終へると私はがつくりして翌日も又其の翌日も得体の知れない熱の爲めに起き上れなくなつてしまつた。遂に喜ばしい宣言を受けた。呪はしい女に熱い血を溶し込む宣言を受けてしまつたのだ。

折返して返事が來た。

最後の時が參りました。

運命が許しませぬ。誰が何んと云つても運命に逆ふ程恐しい事は御座いません。

呪つて下さい。

涙ありません。戀ありません。

冷たい血で御座います。

小杉様お別れ致します。

小杉様

雪子より

運命の皮肉は彼を再び彼女の病院に運んで行くのだ。絶えずきり／＼と締め附ける胸の痛みに蒼白な頬は一層白くなつて。

陰氣な重く／＼夜の中を襦袢は彼れの呪を乗せて走つて行つた。

〔二〕

愈々二度目の病院の日が進んだ。

彼れは全く一言も物を言はなかつた。

黙つて彼女の不可思議な扉から響いて来る音を聞かうとしてゐた。而も彼女は彼れの母も及ばない看護をしてくれた。

はつきりしない日が幾日も續いた。彼は又しても大量の血をはき出した。

黒ずんだ血が赤い血に喰ひ込んで行くかと思はれる様に絶えず流動してゐた。

凄いと乾からびた頬には異様な痙攣が起きて、一言もなく失神した様に開けられた口には幾條もの強直した血が流れてゐた。

「呪の日が近づくのだ」

最後に一言、

「賣女!!」

此れだ俺自身の口から奴の全身に投げつけると其の瞬間あの冷たい奴の血は煮え返つて、大音響と共に奴の心臓は破裂するのだ。其の響の快き、天國への名残の歌の何んと快いのだ。さうして俺は奴を殺し得るのだ。

而し運命は未だく皮肉だ。櫻が散ると千曲川の岸の柳は緑に長くつゞいて、帆船が其の間を縫ひながら流れて行き、やがて夏が来やうとしてゐる。

或る夜の事だ。其の二三日、彼女は少しも彼の室にやつて来なかつた。沈んだ聲で母が云つた。

「ねえ、看護婦さんは今度御嫁に行かれるんだつて。それで今日愈々暇を取つて家に歸へられたよ。本當

に良く心配して下さつて、お前の苦しみ日なんかは寝ないで附いてゐて下さつて申し譯ない程でしたのに。昨日御歸りの時お前に宜敷つて、面倒も出来ずじまひになりましたが、是非よくおなりになつた顔を見て行き度いのですが女の事故涙でも出して病人に悪くてはと歸つて行かれたよ。

お前も早く良くなつてね。」

彼れは眼の前が段々暗くなつてしまつた。頭はもう全く混亂し切つて、かきむしる様に舉げられた手はわな／＼と震へてゐた。

やがて其の手も力なく布團の上におかれると狂氣した様に立ち上つた。

見る影もなく弱り切つた体の奥底から悲慘な叫びが突きさす様に出て來た。賣女!! 賣女!!

母は彼の体に抱き附いて、目まぐるしくおそつて来る悲しみの爲めに泣きながら助けの人を呼んだ。

聲も出なくなつた様な彼の体からは尙も賣女!! 賣女!! とぎれては又かすかに静まり返つた夜の中にひびき渡つた。

死人の涙を吸つた聲は一齊に踊り始めてあの斷末魔の叫びが彼の叫びに混じて響いて來た。

彼れは布團の上に打ち倒れた。

其の口からは恐しいうめきと共に又しても血が流れ出て來た。

幾百萬とも知れない虫が喰ひ込んだ、黒い血の固まりは白布にしみ入つて行つた。彼れは何事かを云はうとしたが、只かすかに唇が震へたのみであつた。

彼れの目の前には彼女の美しい姿が深び上つた。さうして彼れに何事かを語らうともたえてゐた。その姿は又恐ろしい悪魔に變ると、大きい手を擴げて彼れにつかみかゝつた。

死だ!! 死の悪魔だ!!

彼れは恐しい死の前に悪魔の手の前に動く事すらも出来なくなつて横たはつてゐる。

刻々に迫る其の手の前に息苦しくかすかに呼吸するのみであつた。

殺伐と崇嚴との流れが彼れの周圍に流れ始めた。

雪子さん!! 雪子さん!!

誰れにも聞えない聲が彼の喉の奥底から響いて來た。

今や彼れのまはりには全く崇嚴な光りにつゝまれてしまつた。

——一九二九・五・七・夜・二時——

影

北村 恭孝

私は之から、私の賤しい過去の中で、少くとも私にとつて、只一つの経験であり、又思ひ出とも云ひ得るかも知れない追憶の夢を私の貧弱な筆で、最も正直に、最も忠實に申し上げ様と思ひます。此拙い一文を讀んで下らない話だと笑ふ人は笑つて下さい。又少しでも面白いと感ずる人があつたら勝手に面白がつて下さい。私は夫等の客觀的な批評に關しては少しも責任を持ちません。又さうする事が此追憶の夢に對する私の最も公平な態度と思ひますから。

夫は何でも三年程前の事であります。私の腦の病氣が重かつた頃で、而も當時甚だしく胃腸を害して居た事から他の少しの事情と共に、或南國の海岸に轉地したのでした。夫は丁度北の國では總てが白い雪と、寒い氷とに閉された陰鬱な一月の末でした。私は當時何かなしに悲しい、孤獨な淋しさに覆はれた心を抱いて、轉地と云ふ名目で、未だ見ぬ異國の空に、淋しい乍ら淡い靜かさ、毒々しい自分の心の傷を癒して呉れる安息所とを望み乍ら、懐しい故郷を後にしました。

南國の或海岸と云ふのは、私には全く未知な處であり、又何等の關係も無い所でした。只避寒所を選定す

る時、何う云ふ譯だつたか地圖の上で、其處の位置が私に馬鹿に氣に入つた事と、又猶馬鹿／＼しい事には其處の名前が私に何となく氣に入つたと云ふ、そんな氣紛れから、私は不思議に其處に行つて見たくて仕方が無かつたのです。恐らく、其處の位置と、其南國的な名前とが、寒い雪に閉された長い／＼冬を待たなければならぬ私に、或反射的な魅惑を與へたからでせう。そんな譯で、私は其或南國の海岸に行く事としたのでした。今かりに其海岸をT町として置きませう。尤も其處にはほんの一寸とした魚くさい町が海岸に沿つて在つたけれども、全く質朴な漁師町で、未だ都の息の懸らない、ほんとにローカル、カラーの漲つた静かな、村の様な町でした。私は此町端れに在る、此町と同名のT館と云ふ旅館の二階の一間を借りる事としました。

私の行つた時は前にも云つた通り、一月の末だつたので、T館は殆んどがら空きでした。と云ふのは、都にさして遠く無いT町は、流石に夏は澤山な避暑客で相當賑ふが、反對に冬の間は全く客足も無く閑靜な一漁村に歸るのが常でしたから。で、かうした靜かな冬の海岸が當時の私には此上も無いもつて來いの場所であつた事は勿論でした。私は自分の選んだ此場所が私の第一條件にピッタリ適合した事を喜び乍ら、始めて獨りで旅に落付いた時に起る何となく淋しい、不安な、落付かない心持で行李の紐を解いたのでした。こんな譯で、私は遂々T町に落付く事となりました。そして同時に、之から私の追憶の夢が其淡い糸の織目を知らず／＼の間に織り始めたのでした。私は之等の夢をどう書いてよいか知らない。夫は恐らく、之が私の初めての小説めいた記述文である爲ばかりでは無いでせう。

私は今、私の最も書きよい、又最も實感的な描寫法であると信ずる方法——乃ち當時の日記文を書き直さうと思ひます。夫は實に當時の模様を追憶するに容易であると云ふばかりでなく、又最も順な、素直な云ひ方だと思ひますから。

一月二十二日、晴——目が醒めると「トットトットトット……」と云ふ勇ましい發動機械の音が沖の方から聞えて来る。兩戸を開けると廣い海が一度に小さい瞳に押寄せて來た。珍しい冬の海を見たさに、眩しい目を細目にしてキラ／＼する海を見渡すと、發動機船が小さな漁船を幾つも引率してだん／＼沖に出て行くのが見える。夫が一日の漁に出掛ける漁船であること云ふ事は後で勇君から聞いた。太陽は左手の「待夫崎」から少し昇つた處だつた。私は美しい自然の威觀に、体の悩みも何時か忘れて了つたかの様に、ぼんやり何時迄も藍色の廣い海と、紺青の限り無い空とを等分に見つめて居た。かうして居るのが今の自分には何より幸福である。私は之から、此廣々とした海を只一人の親友として三月の末まで此處で暮さう。誰一人知らない此處でも私は少しも淋しいとは思ふまい。此海と、あの空と、海の右手遙かに浮ぶ連山と、其上に浮ぶ雄大な富士とが、私の唯一の友達だから。

一月二十五日、曇、後小雪——晝食を済まして部屋に歸つて、讀書をして居る。風は無いが曇つた空が何となく重苦しい。波の音も今日は少し寒さうだ。暫くすると、耐えかねて居た空から遂々小雪が降り出した。心細くなつてぼんやり硝子戸越しに彼方の森を見て居ると、澄ちやんが階段より一寸首を出して、

「英ちゃんお茶が入つたの、すぐいらつしやらない。お祖母さんが待つて居てよ。」と云つて直ぐ降りて行

つた。澄ちゃんは十五六才の、ほんとに可愛らしい、無邪氣な宿の娘さんだ。

「有難う。今、後から参りますと云つて頂戴」

茶の間に行つて見ると、お祖母さんを始め、勇君と澄ちゃんが長火鉢の廻りに行儀よく坐つて居た。

「植村さん、今日少し寒いやうですから御茶を入れました。さあ何卒一つ召上れ。勇がチョイ／＼上つてほんとに御邪魔致します。」と云つてお祖母さんは自分で一杯のんで見せた。

「有難う。勇君が遊びに来て呉れるので面白いですよ。勇君は繪が御上手ですね。」

「繪なんかだめさ、だがおいらは相撲ぢや仙公にだつて負けないよ、ねえ、姉さん、」勇君は今年尋常四年生の、仲々元氣で無邪氣な少年だ。

「そおね。勇ちゃんは力持ちだわ、」澄ちゃんはお祖母さんの顔を見て一寸笑つた。多分譽めたのでは無く、何か思ひあたる事があつたのだらう。でも勇君は平氣で「さうさあ」とさも得意さうだ。

二月五日、晴——今日は日曜日だ。勇君に誘はれて裏山に遊びに行く。途中でお使歸りの澄ちゃんに會つた。

「姉さん。おいらから裏山に遊びに行くだ。一所に行かんかえ」

「そお、ちや祖母さんに言つて、用が無かつたら後から行くわ。」

「あゝ。跡見公園の大松の處に居るだ。来る時ついでに寫生帖を持つて来てくらつしやいな。」

勇君は私には東京辯を用ひるが家の人達の間では時々妙な方言を用ふ。東京辯は多分夏の避暑客から聞き

覺えたのだらう。高い丘の乾いた途が枇杷畑の間をうね／＼と鈍角を畫き乍ら續いて居る。公園と云ふのはほんの名ばかりの廣場だつた。でも田舎の人達の手で丹念に熊笹が奇麗に刈り込まれて居た。下を見ると今登つて來た途がすぐ目の前に見える。工館の屋根も枇杷の葉越しに半分ばかり見える。勇君に附近の地理を聞いて居ると、澄ちゃんが登つて來た。勇君は直ぐ寫生を始めた。私は遙に彼處の海を夢の國の草原の様にボンヤリと眺めた。よく晴れた風の無い冬の海は、明るい乍らも流石に寒さうに震へて居る。

左手に遙に見えるのは大島だらう。煙がかすかに昇つて居る。富士も今日は麓まで判つきり見える。

「澄ちゃん。大島つてあれでせう。随分大きく見えるね。僕はもつと小さいと思つてたが」

「そお！ 妾なんか何時も見て居るから別に不思議でもないわ。今日は煙がよく見える事」彼女はさう云ひ乍ら嬉しさうによく澄んだ丸い目を見開いて、デット遠い水平線を見つめて居た。無邪氣な、清く明るい彼女の瞳が活々として輝いて居る。南國人が持つ特有な皮膚を持った彼女の顔が、冬の淡い光線を一パイに受けて、ふくよかな頬に一層美しい曲線を畫いて居た。

「澄ちゃんは幸福だね。こんな景色のよい海岸に居て」

「なぜ？ 慣れ、は何處も同じだわ。でも今日はよいお天氣だわね。富士があんなに麓まで判つきり見えるのは珍しいわ」

「三浦三崎で何の邊です」

「三崎はあそこよ。そら、左手に少し濃い山が見えませう。その少し前に離れて見えるのがさうよ」

「僕には一寸も分らないなあ」

「あらいやだわ、あんなによく見えるぢやなくつて。英ちゃん随分近目ね、ホ、ホ、ホ、」彼女は右手を舉げて、顔を私の左肩に近づけ乍ら一心に教へて呉れた。時々彼女の髪が私の頬をかすめた。無邪氣な彼女の笑みが、三崎より僕には嬉しかつた。でもさうした快活な彼女ではあつたが、又フト沈み切つて了ふのが常だつた。彼女の美しい腫の底には何とは無しに或淋しい物語りを宿して居る様に見えた。だが私には其譯は分らない。私は彼女が餘り沈んで居るので、

「もう歸らない。餘り遅くなつて、お祖母さんにしかられるといけないから」と云ふと、流石に彼女は氣がついたやうだつたが、でもさつきの快活さは少しも無くて、

「え、歸りませう」と云つた丈だつた。

二月十五日、曇——今日も亦御茶の御馳走になる。お茶に行く毎に家の人達と親しくなる様な氣がする。例の如く四方山の話しをした後、此時始めて此T館の主婦が、大正十二年九月の地震で無残にも八才になる女の子と共に新館の下敷きになつて、壓死された事實を、話上手なお祖母さんから、恰も當時の光景を目の前に見るやうに聞かされた。お祖母さんの目には老の涙が見えた。私は何だか氣の毒に耐へなかつた。同時に

澄ちやんの淋しさうな瞳の疑問も一時に解けた様な氣がして、澄ちやんの方を見ると、黙つて火鉢の火を見つめて居た。悲しい運命に、餘りにも突然に母と妹とを奪はれた不幸な澄ちやんを私は同情せずには居られない。又同時に平常あんなに快活な澄ちやんを時々思ひ出した様に陰氣にする不幸な過去の存在が怨めしい。

二月二十日 晴——海岸を散歩する。美しい貝殻が、色々な形をして奇麗な小石の間から覗いて居る。私
は何かなしに物想ひに耽り乍ら、獨りで只歩いた。左手の丘陵の松の林の間から、ペンキ塗の別荘が、未來
派の繪の様な奇抜な恰好をしてチラ／＼見える。海には白帆が三つばかり動かうともしないで浮いて居る。
私は何時も腰を下して沖を眺める、親しい大岩の處に來た。今日も亦取り止めも無い儚ない空想を盡き乍ら
私は岩の割目に溶け込む潮を眺めて居るのである。潮の中には名も知らぬ海藻が流れて居る。ちつと視つ
めて居ると海藻を通して底が見える。底には永久に太陽の直射を知らぬ小石の群が、夫でも嚴かな濤の音楽
に、勇敢な騎士達の様に、靜かな默禱を續けて居る。私は今、只、靜寂が欲しい。若し絶對的な靜寂が此世
に在るなら恐らく此小石では無からうか。フト私は此小石が羨しく感ぜられた。

二月二十五日 暴風——朝から烈しい西風が一日吹いて居る。時々港の蒸氣船の氣笛が波の音に混じて氣味悪く聞えて來る。立切つた雨戸が時折破れさうにひどくガタつく。獨りで部屋に居るのが何となく恐ろしい程だ。

二月二十六日、晴

「英ちゃん若布拾ひに行かない」と云ふ澄ちゃんの聲がピーピー（木の名）の生垣から聞えたのに目が醒め

た。昨日の暴風も忘れたやうに、今日は底の抜けた様な上天氣だ。澄ちやんと濱へ出ると、尖きに鈎の付いた長い竿を擔いだ勇君の元氣な姿が砂丘の向側を歩いて行く。濱には既に五六人の子供達が何か突飛な發音で喚き乍ら渚を彷徨つて居る。大方若布を拾つて居るのだらう。渚には昨日の暴れで澤山の海藻が打ち上げられて居た。だが若布らしいもの一つも見當らない。

「あら、そんな處には若布は無いのよ、若布はね、波に浮んで流れて居るから波が打ち寄せた時上手に拾ふの、あらあそこに一本見えるわ、辛手が届かないわ。一寸英ちやん取つて呉れない」

「どれ何處に、僕には分らんよ。是ですか」

「否、異ふの、それあの、ヒラ／＼するのよ、真中に筋が通つたので無くつちやだめよ」彼女は熱心に教へて呉れた。そして遂には自分で白い脛を冷たい潮に入れて拾つたりした。私も五六本拾つた。

「澄ちやん休まない。之丈拾へば僕はもう澤山だ」

「え、今上りますわ。勇ちやん、勇ちやんてば、一寸お出でよ、姉さんがよい物を上げるから」彼女はさう云ひ乍ら、大岩の側で一人離れて、長竿で熱心に若布を掻き上げて居る勇君を呼んだ。勇君は、

「オー、今行くべー」と云つて小さい手に、若布を一杯ぶらさげて走つて來た。

「勇ちやんの好きな箱鯛を上げるわ。ほらこんな大きいのよ、昨日のシケで舉げられたんでせう。氣を付けないさいよ。刺が痛いから」

勇君は箱鯛とわかめを手に敵の首でも持つて歸る將軍の様に元氣よく家に歸つた。

三月六日、晴——もう三月だ。ボブラの葉が若々しい新緑を誇らしげに清爽な大氣の中に輝かせて居る。裏の畑の夏蜜柑がだん／＼味がよくなると、濃藍の海は鈍重な姿から再び明るい希望に躍動を開始した。此海がやがて夏への新装を整へ、潮干狩の頃になれば、私は此懐しい町から離れなければならない。さう思ふと、急に暗い影が自分を一時に包む様な氣がする。何故か分らない。けれ共、何となしに淋しい、名残惜しい感じが小さい胸に一杯に漲るのだ。

三月十日、晴——T館の人達とN、F觀音様に參詣しに行つた。お寺に高い石段の上に在つて非常に眺望がよい。一行が參詣してから、澄ちやんが鳩に豆をやり乍ら、

「英ちやん、お豆をおやりにならない事、とても面白わ」と云ひ乍らお椀の豆を半分私に分けて呉れた。彼女の白いキャシヤな手が巧に左右に動く度に、同じ鑄型から此世に生れた様に相似た鳩の群が「ククー」と鳴き乍ら右往左往した。私は限り無い變化に富んだ美しい人の手と、其優しい複雑な心、姿に同じ鑄型から生れたかの様に相似た鳩と、其餌の外に何も求むるものを持たぬ眞白な、單純な魂とを比較して見て獨り微笑した。

三月二十日、晴——此頃は天氣が續く。久々で魚臭い町を通つて魚市場へ澄ちやんと魚買ひに行つた。見た事も無い様にな魚が、様々な姿勢でコンクリートの土間に抛り出されてた。澄ちやんは流石に濱の娘だ。私など聞いた事もない魚を一々教へて呉れた。歸りには、途中所々に椿の花が奇麗に咲いて居た。

「英ちやん、一寸待つて、頂戴、妾、椿の花を折つて來るから」

「何するの」

「お母さんに上げるの」、かう云つて彼女は一寸笑み乍ら、小走りに椿の花を折つて來た。私は何だか妙にいちらしくてならなかつた。

「英ちゃん何時歸るの?」

彼女は突然尋ねた。ほんとに突然だつた。

「何處へ?」

「御國へよ」私は何と云つてよいかわからなかつた。

「もう直き歸らなきあならないんだよ。いま十日もしたら、澄ちゃんとも御別れだよ」、私は強ひて之れ丈け云つた。否云ひ得たのだ。

「さう。もつと遊んでいらつしやらない? 家も無人なんだから」彼女はかう云つて名残惜しさうに、淋しく私の顔を見上げた。私は何と云つてよいかわからなかつた。美しい純眞な魂よ。私はもつとく彼女と共に、この海岸で遊んで居たいのだ。彼女も共に私達と一共に若布も拾ひたいだらう。逢島にも遊びに行きたいだらう。一緒に本も讀みたいだらう。併し内氣な彼女は餘り口をきかなかつた。只例の様に下を向いたまゝ歩いた。私は彼女の賢さうな横顔を永久に深くく私の心に刻むべく、時々彼女の顔を盗み見た。夫がどうとう彼女に見つかつた。

「あら、何故そんなに差の顔を御覧になるの? いやだわね、ホ、、、」、彼女は別に恥かしさうな顔

もせず、無邪氣に、朗かに笑ふのであつた。

「澄ちゃんを御別れする日が近づいたからさ」

私はやつと之れ丈け云ふ事が出來た。話したい事の限らない中から……。

三月二十八日。晴——いよく今日は御別れだ。お祖母さんと、澄ちゃん朝早くから色々勝手で急しさうだ。荷物は昨日の中に驛へ出してある。お祖母さんと、澄ちゃん、勇君とに送られて懐しいT館の石垣を出た。

そこには二月餘り、私の心を慰めて呉れた海が、今日もまた久遠の音楽を奏で、居る。懐しい海よ、さらば!! 汝永遠に若かれ、濱の少女の如く。

私はともすれば泣き出したい様な氣持に負けまいと、強ひて口笛など吹きすさびつゝ、小高い丘の切通しを歩いた。やがて見覚えのある別れ途に來た。

「お祖母さんも、澄ちゃんも有難う。もうよいから何卒御歸り下さい」

「いゝのよく、妾何うしても驛まで行くのよ」彼女はダダ子の様に私のバスケットを握つて離さなかつた。驛に着いた時は未だ時間が十五分程あつた。

「祖母さん、永い事、色々御厄介様になりました。夫では御大切に」

「有難う御座います。何卒又夏いらつしやい。子供が淋しがつて居ますから」

「えゝ、有難う。又是非遊びに來ますよ」

其時、汽車が白く光つた二本の軌道の上を猛烈な勢で走つて來た。私は心と身が二分される切ない苦しみを味ひ乍ら、牢獄の様な車室に入つた。

「澄ちゃん、さよなら。勇君さよなら」私が小さく挨拶すると、二人は夫々賢しげに、

「左様なら」、「左様なら」と云つた。流石に澄ちゃんは涙をぬぐつて居た。私は唯胸が一杯になつた。目ばかりくるく廻るのみだつた。何も云ひ得ない人形の様に。でもお互の心の底は悲しみで燃え乍ら。

汽車は何の容赦も無く動き出した。澄ちゃんは涙に光つた美しい目をぢつと見開いていも一度、

「さよなら」と云つて、強ひて微かに笑つて見せた。只夫だけである。

車輪の廻轉が、だんく烈しくなつて行く。私は悲しみの夢心地の中に、過ぎ去つた二ヶ月を想ひ起した。一体夫は何であつたらう。私は大きい悲しみの中に、強ひて夢の様な幻の後を追ふて見た。けれ共、今の私には何も分らない。恰も一抹の雲の影を追ふ様に。

私は次第に静まつて行く心の落付きを待つて居るのみだ。そして其影をぢつと見極めようと思つて居る。

けれども一体何時になつたら私の心は落付きを取戻し得るのか。私は猶苦しみ乍ら其影を見つめつ、二ヶ月の空想を思ひ浮べるべく焦つてみた。

——一九二八・十二——

破られた幻想

釣 谷 武

灰色の埃が霜の様に一面にをき、長持、箆笥、什器等が雜然と積重ねてある。土藏の二階に彼（定夫）は身動き一つせず坐つてゐる。古道具類より發する一種特有の微くさい臭があたり一面に漂つてゐる。肉體の全神経を集中してゐるかの様な彼の兩眼は、一枚の記録に吸ひ付けられてゐる。金網を張つた高い窓より入り來る一脈の光を頼りに。

見よ！ 忽ち彼の顔には驚愕の表情が溢り眼は血走つてきた。讀み終つた彼は、深い眠から起された様に茫然としてゐた。

叩きのめされた様な激しい衝動により彼の頭腦は混亂の極に達し、全く秩序が破壊されたのであつた。然らば其の紙片に何が記されてあつたのであらうか。

明治四十二年四月一日福井縣平民小濱町富士町松浦忠兵衛長女澄を娶る。同年六月入籍、同四十三年長男定夫出生、同年十月相方合意の上離縁同年十二月除籍。

再び讀み返した。然し眼の誤りではなかつた。古き記録類に興味を有してゐる彼は夏休暇に歸省中土藏の

用筆筒の引出しに於て今日一冊の覺書きの如き記録に於て之を發見したのであつた。生を享けて二十年彼は全く此の秘密の存在即ち二人の母ある事を夢想だにしなかつた。

帶の様に長々と續いてゐる三景の一つ天橋の白砂青松を優しく抱いてゐる宮津灣岸の宮津町の豪家の一人息子に生れた彼は、人生の辛酸に對しては全く無關係に父母の慈愛の下に無邪氣な少年時代を過してきた。今では京都の某大學豫科に籍を置き、寫真旅行等を事として、都會的惡風には少しも泌みてはゐなかつた。彼は忽然惱を搔き廻はされた様な氣がしたので、平靜に歸る爲に家を飛出して海岸に赴いた。

入海特有の女性的感覺も始めは彼の激した心には熾石に水であつたが、時の經るにつれて優しき自然の力は彼の心を靜めると共に一つの感情を育くんだ。未だ見ざる母への淡き憧れの情を。

やがて西の空は翌日の晴天を豫告するかの様に紫、紅を以て彩られ、それは更らに東空に反映してゐた。海には無限の彼方より彼の眼前に迄一條の黄金の帶が織り出され、海の彼方より定期蒸汽船の氣笛が遠くの方より歌ふ様に響いてくる。空には塙に歸る鳥の姿が三つ四つくつきりと浮んでゐる。此の筆紙に盡し難い自然の美景は彼の心を恍惚とさし、一時總ての感情を忘れしめた。更に日没次第に蒼然たる暮色が空の彩色を消し、黄金の浪は白銀の浪に變る頃となつたので、やつと我に歸つた彼は靜かに家路に向つた。

家族團欒の夕饗の膳。浮世を離れた様な祖父の顔も一本の酒に陶然としてゐる。父の面も慈愛深き母の眼も、今日の日は、まともに見得ず忽にして飯を終へた彼は其の一枚を寫し取り、もとの如くに片附けて再び海岸へと向つた。

日の全く暮れた砂地には團々とした夏の月が松の影と、彼の徐ろに歩む姿を砂地の上にくつきりと描いてゐた。

靜かに寄せては返す漣の私語が漸く聞きとれる海近くの松の根元に腰を下した。時に思ひ出した様に團扇で蚊を拂つてゐる。

彼の頭には涸れた泉から涌き出る水の様に、色々な感情が湧き起つた。彼は何かしら愉快であつた。即ち自分が戯曲や物語りの主人公の様な役割にあると云ふ事が、彼の様な順調な換言すれば變化のない生活を送つてきた青年にとつては堪へられない程の、好奇的又冒險的魅力を以て心に纏ひつゐた。

彼はうつとりとして母との對面の劇的場面を空想して快き陶醉にひたつてゐた。母の再婚先きを訪れた彼を、母は手を取らんばかりにして招じ入れた。絶ち難き肉身の絆は二人を無言の儘に涙ぐませるだけであつた。

更に舞台は一轉して第二の夢が展べられた。

一人淋しく獨身生活をしてゐる母を訪ねると、母は萬感胸に迫つて導き入れ様としたが、あはて、閉ざした障子の中よりやがて漏れて來た母の鳴咽、隔てる紙は薄くとも母の心をはかりかねて力なく悄然と立ち出る己の姿。

次いで第三の幻が、更に第四の……。彼の魂は唯一脈の浪漫的憧憬に抱かれて夢の世界をさまようてゐる。

純なる定夫の空想は孰れも小説、物語を基礎とした、美化的人生より脱し得なかつた。

美はしき戀を描き夢みる若人多きも、悲戀に終る場合を想はざる如く。

慰した様な静かな海面に忽然躍り上つた魚の軽い水音が、死の様な静寂を破ると彼の魂も一瞬にして遠きさまよひから現實に歸つた。

砂に込み込んだ夜の冷氣は、腰を下してゐる彼の着物より腰へと、更に身体全部を冷やした。立ち上つて空を仰ぐと月は群星を壓して中天にかゝつてゐた。それは時を知らずに充分であつた。彼は腹一杯涼氣を吸うて、しつとりとした砂に一步步徐ろに足跡を印した。今歸つてきた魂に静かな安息を與へつゝ、

何處からともなく突發的に一つの考へが浮んだ。——秘かに父に尋ねやうか——。

然し考へてみると、彼にとつては空前絶後な此の重大事件を、彼が浪漫的幻想を以て柔らかに抱擁してゐる此の事件を、父の事務的な無味乾燥な用語によつて、此の夢の様な疑問が簡單に片附けられる事は、玉手箱を無難作に、他人の手によつて開けられる様な氣がするのであつた。又生母が家を去つた理由原因を聞く事は何となく恐しく、不安な思ひがした。此の様に色々な事を考へてゐる中に彼は家の前に來た事を感じた。

古い家屋に特有な効用價値の少ない部屋々々を通つて奥にある彼の書齋にはいつた。すぐ彼は床を延べ蚊帳を吊り、今夜に限つて本を見る氣にもなれずそのまゝ、床へは入り、すぐスタンドの電燈を消して色々考へた。

兎に角翌日は小濱へ行き、若し母の實家が尙現存してゐるならば少し様子を探つて來やうと思つた。彼は

母の消息等には殆ど期待をもつてゐなかつた。唯小濱へ行くことそれ自身が彼の小説的感情を満足さすのであつた。然し母が地球上の何處かの一点に生きてゐると確信してゐた。やがて底知れぬ深い眠りに落ちた。

翌朝は紺碧の空に一点の雲もなかつた。朝またきうちは赫々とした朝日の中にも、すがすがしい曉風が涼しく道行く人の襟を撫でてゐた。然し午後の炎熱を思はずには充分であつた。母には濟まぬと思ひながらも近郷の友を訪れると稱して十時頃停車場に向つた。

汽車の轟音と實行手段に訴へた胸のときめきの爲に、何となく落着かず彼の頭腦は唯斷片的な感情の羅列をなすに過ぎなかつた。其の感情の切目に於て時々窓外に瞳を向け、或は汽車が遅い様な焦燥にかられた。腕時計は十一時を示してゐる。

眼を轉じて車内を瞥見すると暑さの爲か、旅の恥は掻き捨てと云ふ島國根性の爲か三等乗客の大部は無作法、醜態の限りを盡してゐた。胸をはだけて眼のみを新聞に向けてゐる者、肌をぬぎ、毛だらけの太股をまくり出し、眞赤な顔をして正宗の瓶を傾けてゐる髯男、狭い腰掛けに大きな體を蝦の様に曲げ、白痴の様に口を開けて惰眠をむさぼつてゐる者……、孰れも五尺の體をもてあまし、生活に對する倦怠に満ちてゐる様に見えた。其の中にあつて己のみが天より何かの使命を授かつた人間の様な氣がして超然たる優越感を抱くのであつた。

人間の感情には全く無關心な汽車は一聲の汽笛を残して丹後と若狹の境のトンネルにもぐり込んだ。數分の後暗やみから出た汽車は奇巖重々として海中に佇立し、漂渺として自然の絶景をなせる若狹灣岸をまつし

關西方面の十數名の避暑客と共に、此の小さな閑靜な驛より吐き出されると、今迄の空想的感情は影をひそめ、鋭い緊張が肉体を引き締めた。彼は豫定の行動として近くのうんど屋兼氷屋とも云ふ可き一寸小ざつぱりした店には入つた。硝子の簾が冷やかに彼の頬を撫でた。内部は陰氣な土間で眞中にテーブルと共に二三の粗末な木の長椅子が置かれてあつた。中にはお客が一人もなかつたので、ほつと安心した。やがて奥から、薄ぎたない浴衣をだらしなく引かけた四十程の女が出てきた。彼は氷の注文をしながら、「富士町に松浦と云ふ家があるかい」と尋ねた。何氣なく装ひながらも慄のく心を抑へ、全身の注意力を兩耳に集中して女の答へを待つた。判決を受ける被告の如く嚴肅な氣分に包まれながら。

此の女は餘程饒舌と見えて問はぬ事迄さへも己の自慢の様にべら／＼話するのであつた。之によると町内でも有數な素封家で可なりの田畑をもつてゐるらしかつた。

一脈の安堵も驚愕と、事件の外延の縮小に伴ふ狼狽を渾身の力で以て抑へた。

「一番上の娘は何處へ行つてゐるんでしたかね」
おかみは一吋首をかたげてちらつと彼を見た。彼の胸は激しく鼓動し始めた。全くの杞憂なる事がすぐ判つたが。

「あゝ、さうく大阪の方に行つておいでるさうな。何でも二度目とか……。今子供をつれてお里へ海水浴にきておいでるやうに聞いてゐますよ」

何と云ふ偶然の一致、神の惡戯であらう。彼は驚きながら家を出た。單に夢見る様に浪漫的に想像してゐた事が、夢でなく全くの現實となつて現れた爲に彼は行動に迷つた。然し歸る事は殘念であつたが歩みも進まなかつた。

「お前は何と云ふ臆病者だ。お前の憧れてゐた小説の主人公になる氣はないのか、勇敢に突貫しろ何が恐しいのだ」彼は弱き心に鞭つた。探険に行く様に心を戦かせながら、大きな麥藁帽子で人目を避ける様にして門前に着いた。

古い家ではあつたが、宏壯な壓倒される様な感じがした。幾星霜経たらしい、墨だけ残して木地は風雨の侵蝕作用を受けた大きな表札に彼の視線は吸ひ付けられた。彼はまるで夢にでもするやうに入口の戸に手をかけた途端「チン／＼」と鈴が鳴つた。鈴の音にはつとすると心臓は破裂するばかりに鼓動し、顔は赤熱した鐵の様になつた。やがて女中が出てきた。

「あの、大阪からお歸りになつてをりますか」

「ええ、大阪の奥様でございますか」

「それじゃ之を一寸」と云ひながら名刺を差出した。女中は變な顔して立ち去つた。此の二三分の會話は彼の心に少し餘裕を與へた。退去する事が不可能な爲めの諦らめの爲かもしれぬが。再び出てきた女中は彼を庭に面した薄暗い座敷に導いた。然し庭には百年以上も経たぬと思はれる様な杉、松が鬱蒼として日光を遮り、涼風が吹き來るので彼は全く汗がひいて體が涼しくなると共に、心も外面だけは稍々冷靜になつた。そ

して生れて始めて手術室に連れた患者の様な氣分を以て待った。

葉度胸をするてゐたと云ふものゝ、やがて聞えてくる靜かな足音の一步々々が彼の胸に一つく熱い塊をつき上げてくる様で、體のやり場をもてあまし、消えてなくなり度い様な氣がした。

徐ろに背後の唐紙は開いた。彼は石の様に堅くなり、溺れる者が木片を掴む様に、しつかりと扇子を握り締めた。彼の前に危なげな手付きで麥茶と絞った手拭が置かれた。彼は救はれた様な氣がすると共に自分のあわて方がふき出したい様な氣がした。

女中が去ると殆んど同時に又唐紙があいた。今度は前よりはいくらか落着いて只備したまゝ、手を膝の上に置いてゐた。先づ澄(生母)は口をきつた。

「まあ、定夫さん、よく來てくれましたね、それにしても随分大きくなつてね。さあ、暑いから膝をくづしなさいよ」

彼女の聲には肉親に對する情愛を認める事は出来なかつた。唯奇異の響きがあるばかりだつた。

「どうして此處が判つたの。誰かに聞いて」

「い、え、内で一寸記録を見たんです」

と云つて彼はちらつと母の顔を見て再び眼を伏せた。都會生活をしてゐる爲か、年の割には若作りをし、明石の單衣をきて靜かに團扇を使つてゐた。彼は家に待つてゐる、質素な地味な身なりをした、溫和な母を思ひ浮べて變な感に打たれた。そして彼は期待してゐた様な激しい感情の高調から救はれた様な氣がしてほつ

とした。其の反面には一抹の物足りなさを以て。

「實はね、或る事情があつて、あなたが生れて五六ヶ月してから私は里へ歸つたのです」彼女は一寸眼を伏せた。

「今、大阪にゐらつしやるんじゃないんですか」

「え、子供が三人もね」

兄弟のない彼にとつては會つてみたかつた。然し彼女の態度口調は、それを云ひ出すにはあまりに他人行儀であつた。そして母が會はさうと云はないのが何となく恨めしかつた。物足りなさの情は不平不満、更に憤怒の情に變つた。彼はもう一刻も居りたくなかつた。

やがて話は一寸途切れたので、彼は、

「汽車の都合もありますから、もうこれで失禮します」

「い、じゃありませんか、晩御飯でも食べていらつしやい、い、でせう」

其の言葉すらも彼には心にもない口先だけのお世辭の様に思はれたので、挨拶もそこくにして、炎熱の下を濱邊へ急いだ。

彼は己の美はしい幻想の殿堂が踏みにじられ唾棄せられた様な汚辱を感じた。實に彼の様な世間知らずの一本氣の青年は己の純眞なる誠意、愛情が相手に都合よく報ゐられる時は、總てを忘れて感激の極に達すると共に、それが踏みにじられた時は侮辱、憤怒に燃える。其の原因を考へる暇もなかつた。

濱邊には、天然の絶景を背景にして、眞黒な瀧に幼子が戯れてゐた。實に飾らざる自然の極致を示した一幅の繪であつた。怒れる彼をも微笑させずにはおかなかつた。然し彼の心はなかく、静まらなかつた。唯わけもなくあちら、こちらと濱邊をさまよひ歩いた。ふと家に待つてゐる母を想ふと、叩きのめされた様な氣がした。噫！二十年間の母の献身的母性愛に報ゆるに何と云ふ大きな愛の冒瀆を以てしたであらうか。己が蒙つた此の汚辱は、己の犯して冒瀆に比すれば大海の一滴にも及ばない。彼は心臓を焼火箸で抉られる様であつた。不孝者、何と云ふ大きな悖逆者であらう。彼は母の足下にひれ伏して總てを告白したくなつた。かう思ふと若人の矢竹心、一刻も早く歸りたかつたので踵を廻らすと夕方近くの炎天の下を一直線に停車場に急いだ。残念な事に汽車は一時間程待たねばならなかつた。暑いのでラムネを續けさまに二本飲むと、忽ち汗は流の様に體中から吹き出し、顔は燃える様に熱くなつた。一時間——何と長い事であつたらうか、彼は追はれる様な不安と焦燥を以て待ちあぐんだ。

やがて四五台の舊式の客車と、數台の貨車を連結した、煤けて黒くなつた汽車が風を切つて構内に突進してきた。

彼は追はれる様に飛び乗つた。人は可なり疎らであつた。心が少し静かになると彼は今迄の母の愛情の一つ／＼を思ひ出しては、涙ぐましい様な感謝に打たれるのであつた。今迄何の氣に止めない様な事でも今は全く有難かつた。汽車は六時半頃宮津驛に滑り込んだ。

何時の間にか一点の雲片は、水の中に落した油の一滴の如く忽ち空中に擴がつた。そして彼の下車した時

には生ぬるい風が往來に砂煙をあげてゐたが忽ち大粒の雨が落ちてきた。續いて銀箭車軸の様な激しい夕立ちとなつた。

彼は雨を晴らさうとせす片手で帽子の鰐を前に傾け、片手でまくつて、ひた走りに走つた。彼は濡れる事は問題でなく、一刻も早く母の膝下に歸りたかつた。

背中迄はねをあげながら二十分程後家に飛込んだ。麥藁帽子の鰐は、びつしよりとした水の重みの爲に下へ垂れ、着物よりはばた／＼滴が落ちた。飛び出てきた母は全く驚いて、

「まあ、お前こんなひどい雨なら少し雨晴しをして居ればよいのにね、ほんとに厄介な子だね、さあ／＼早く着物をおぬぎ、濡れた物を着てゐると毒だから」

と云つて母はタオルや浴衣をもつてきてくれた。彼は黙々としてゐた。否言葉が出なかつた。常なら何とも思はぬ母の氣遣ひも今日に限つて涙が出る程有難かつた。足を洗ひ着物を着て茶の間に來た。父の姿は見えなかつた。「お父さんは」「今日町内の寄合があつてお出ましになつたよ。お前御飯まだ／＼らう」「え、」「それじゃおながが空いた／＼らう、さ、すぐおあがり」と云つて母は膳を運んできてくれた。彼は今日のことを打ちあけやうと思つたが、母の何も知らぬ優しい態度に接すると、咽につかえてどうしても言葉は出なかつた。そして全く落着かずに飯を喰つた。終に彼は極度の緊張を以て將に言葉を發せんとした途端、「おまゝ」と母は女中を呼んだ。

彼は全く出端を挫かれ再び云ひ出す元氣はなかつた。女中が來た。「あのね、お膳をさげて、水蜜を持つて

きておくれ」

母は水蜜の皮をむいて彼に渡しながら、

「お母さんは今から濱の伯父さんの所へ一寸用事があるから行つてくるよ」

と云つて外出の用意をした。

彼は庭に面した自分の部屋へ來た。鬱蒼とした横の右側には、大きな月が雨で拭ひ洗はれた様に澄み切つて見えた。

雨滴を帯びてゐる木の葉影を通じて吹きくる風は冷やかに彼の頬を撫でた。彼の魂も撫でるのであつた。更に清らかな月の光は彼の心に一つの解決を與へてくれた。天は人間に一人の母しか授けなかつた。然るに自分は一人の母に飽きたらすして、更に他の一人を求め、之に勝手に母としての條件を空想し憧れ、己の幻想が破られたと云つて立腹するとは何と云ふ大馬鹿者だつたらう。母としての務めを果さない人間に向つて、之を要求するとは何と云ふ亂暴者であらう。此の心を以て總てを打明けたなら母も必らず赦して呉れるであらう。世俗に染まぬ彼の朗らかな清らかな自然性に歸つた彼の魂はあの玲瓏たる月の中に溶け込んでゆくのであつた。

六號雜誌

原稿を書き終へてから

みのる

やれやれどうやら済んだ。偉大な苦業を積んだ大聖者のやうな氣になる。三日間といふもの學校へ出ずに書いたんだもの、その間は苦しかつたけれども或る喜びと希望を絶えず抱いて努力した。完結させて見るともつと書きこむべきものが澤山なければならぬやうな氣がしないでもない、あんなに苦心したのに原稿の奴めが一向俺に同情してくれんわいと、いま更書きあげた作品が怨めしくなる。氣分なんか自分では一向分らない。まして成功したかどうかは更分らない。すゝめ分無責任な製作ではある。けれどもこれが正直なところ過去半々年後の私の貧しい收穫なのです。

ついでに斷つておきたいのは、この二幕のあとにエヒロカグを加へたかつたのです。だが寸時も假借することのない時間と貧弱な頭腦はそれをゆるさなかつた。だから結局なんだか尻切れとんぼのやうなものになつてしまつた。いづれこのエヒロカグは獨立した一幕物にまとめたものです。かへすがへすもこの貧弱な頭腦と精力が怨めしい。哀れな腦味噌よ、呪はれてあれ。

私は雑誌を發行するがためにこんな苦勞をしたくない。だがすばら者は締切後でなければペンを持つことが出来ない。我ながら遺憾千萬なことである。こんな事や作品の進歩など到底望めないことだ。

然しうれしい事には、ちよいちよいペンをとつては作品を大切に貯藏してゐる人が發見されるのである。例へば私のクラスではY君、N君、K君等である。今度はY君の作品をれだつて戴くことが出来た。N君やK君は自重して次回には必ず出すや

うに約束してくれた。部員ではあるがF君、K君の作は古いのを見せて貰つて是非出すやうお勧めしたのでつた。

勿論吾々は完成された作品を作ることは全然不可能のことである。然しながら吾々の藝術としてはその不完全なところに吾々の藝術的價值があると云つても敢て詭辯ではあるまい。即ち吾々はより善くより完全により眞實に近づかうと努力してゐるものである。だから吾々の作品もその努力、その目的に達せんとする苦悶のシンボルであらねばならぬ。よしその作品が全世界の人類をして嘖飯抱腹せしむる底のユウモアに溢れてゐても必ずその底には血の滲むやうな苦悶が潜んでゐるのを發見するであらう。どんなに人の魂を地底へひきずりこむ様な深刻さを表はしても不眞面目な分子が含まれてゐれば白晝幽霊がとび出す以上のものに違ひない。

陳腐な議論を私はいま振廻したが以下に私がこれから言はんと欲する

ところなのである。即ち以上の平凡な議論は馬鹿にされるほど誰もが知つてゐるところである。然るに之を充分承知しながらなほ自分の作品を鑑詰めにして貯蔵してゐる人が澤山あるのである。なんのための鑑詰めだらう。一千九百二十八年に作つた鑑詰は昨年のものである。それより一千九百二十九年の新鮮なヴィタミンの多分に含まれた奴をとつて食はう。その味を吟味したら更に一千九百三十年のヴィタミンの含量を多くしようではないか。それなのに一千九百二十九年の作品を味つてから徐ろに昨年の鑑詰をあげたところでは何の足しにもならぬ。ゆゑに吾々は吾々の作品を片づけしから市場に運ぶ必要がある。その市場には深刻な顧客が待つてゐる。そしていてゐる。吾々は市場に群る人々の聲に耳を傾けなければならぬ。それは顧客に決して媚びるのではなく吾々に對する公平な批判を得るが爲である。吾々は決して獨斷に陥つてはならぬ。

ぬ。精神病者、變人、奇人は獨斷を表徴化したものである。

精神病者、變人、奇人、奇人で満足出来る人になんとも私の口から申上げる言葉はない。最後に私がこんな理窟をならべたのは吾々北辰會の雜誌を利用せよといふプロパガンダだといふ事を白狀しておく。

近く雜誌部なんていふ「しんぶんや」と言つた感じのする厭な名をかなぐり棄て、フレッシユな感じのする(敢てモダンだと云へないが)文藝部と名乗りを掲げようとする秋だ。雜誌は吾々部員のものであると同時に最も公平に北辰會のものである。吾々部員はペンを握るのが飯よりも好きだといふ關係から編輯小僧の役を務めさせて貰つてゐるに過ぎないのである。雜誌部ほど開放的なそして大衆的な部は他に一つもあるまいと思ふ。部の豫算はみな雜誌に變形させて北辰會員に最も公平に分配する。こんな事はどうでも可いが原稿もひろく會員から募集するは勿論、其他の事業例へば短歌會、詩話

會、脚本朗讀會等はみな開放して多數の參會を待つてゐる。この中最も困難な脚本朗讀會に於ては吾々の部内だけでは更に發展することは難しい事であるから更に部員外の同志と共に演劇研究の實を擧げる事は私たち(或は私一人かもしれないが)の切望して止まぬところである。

とにかく文藝部となるんだ。吾々は更に一層奮發しようではないか。

一六・五日記

◇

内 田 生

我々は非常に忙しい、學校の宿題や豫習で。でもその間に閑暇を作つて詩作に耽けるのは私の最も愉快な時だ。特に近頃思索詩作が好きな事になつて他人との交渉がいやになる事が多い、所謂嫌人病が、その原因は諸君の御想像に委す。

さて狂人の漱石はどうしてゐる。變態の武郎はモデルでシヤフハッゼ

駒 井 生

冬休み、春休みはよいとして、夏休みの五十日は、どう考へても長が過ぎる。で、出来る事なら八月二十日から第二學期を始めて、九月下旬から十月上旬にかけて、秋休みの十日が欲しい。授業日數に何等關係がない事だから。

先達つて一臺の乗用自動車、狭まい道で、道をさげないと云ふ理由で荷車ひきを馬鹿呼ばはりをして居た。

一人人間が速度の早い車に道をゆづるのは、先に出してやらうと云ふ好意と、觸れると危ないと云ふ感じと常識から行なふ事で、自動車の速力が早いと云ふことは、人をして路をさげさせる理由にはならないはずだ。あの事實を目撃した時は一寸腹が立つた。

し み づ

文藝とは文筆を通じての生命の藝術の表現である。何人か云ふ、生命の藝術は決して筆紙の如き物にては現し得る物ではない、と。

成程真理はindescribableなものかも知れない。然し有を通じて無を見せる所に文藝の生命があるのだ。

断髮全盛の近年、文章の断髮「○○○○○○」や「ハハハハハ」の流行るものも亦尤もの話だ。これもindescribableのお仲間かも知れない。

いよ／＼文藝部に名前が變つた。曖昧な分子の多い今日、文藝を高く標榜して立つた我部の抱負たるや又indescribableなものがあるではないか。

ンのテイルテイルを今も戀ひてゐるだらうか。龍之介は蛇を喰ひ切つたかい。それ等が私の現在に純文藝的に又、甘い誰かの夢の様に理想としてゐるのです。これも社會のエンタリツクルングと大關係があるのだと考へると、一寸變な氣もする、何しろ多くの蛆虫文學青年が讃仰してゐるのだから。それにつけても今のモダンガとボ——もつと新しい語でいふべきだが——を誤解する様な人が此の中にも居るけれども、よく考へれば彼等こそは實に時代の先驅なる事が分るのだが。孔子やシヨ——ペンハウアを煩はさないでもガイガスチンがよく知つてゐます。「ヨカンナ」はどうしてゐます。

とに角、私は生れて來たのだから進むべきと信ずる方へ進みます。馬から落ちて怪我をせない程度に。さうして皆が、もう少し詩に批判を持つて下さる程度に。

私の心臓には、緑色の血が朱唇を反撥しつゝ、人生行進曲を怒鳴つてゐます。

みのり

私達が長い間の希望であつた「文藝部」の名が新たに雑誌部の位置におきかへられる事になつた、とにかくあるべくして改題されたに過ぎないのであつて、もとの講談部が今の講演部である様に名目上だけの變更で勿論内容は従来の雑誌部の事業をその儘承継するものである。只私達の喜びとする處はこの新しい文藝部なる名のもとにきつと今までよりも明るい將來を約する事が出来ると思ふ事である、此約を果さんか爲に次號より私達部員は今迄より一層の精進をなすだらう。

と同時に校内諸兄に於ても從來以上の投稿をされることを望んでゐます、一月にあまる暑中休は諸君の趣味を確立するに充分な餘裕を與へるものと信じます。されば山に行かれるにしろ海に行かれるにしろ或は又家に居て讀書されるにしろ少しも創作心研究心のある方にとつて五十日といふ休暇は一ツ二ツのまとまつ

たものを書き上げるに適はしい時に違ひなからうと思はれます。

文藝的創作論文は勿論の事、學術的研究の投稿も多數せられむ事を次號に期待して諸兄の暑中休暇に楽しみ多かれと祈ります。

修

部のこと

出くわす毎に「どうだ」と云ひ「あかん」と云ひ、「書けるか」と云ひ「書けぬ」と云ひ、それでも矢つ張り二言目には仕事、仕事と云ふ。その癖「お茶でも飲まう」と云ふことになれば大丈夫三時間はつぶす氣である——そんな輩の寄り合つてゐるのを文藝部と云ふ。われながら浅ましい次第。

高村のこと

いつかのこの雑誌にブレイク論を寄せて呉れた高村が死んだ。彼の兄

さんが、故人の死の直前に残していつたものだと思つて次の歌を僕に書き送られた。

小夜ふけて醒むる眼に見る母のかげ火桶ふきつゝ、ほゝやせ給ふうぐひすの初音きゝませ梅の鉢枕べにおく兄なつかしも

四十度の熱出で醫師を待つ間にぞ吾子の死を思ふ親心知る

昭和四年度北辰會役員

會長	武藤 虎太
副會長	上原 菊之助
理事	星野 信之 長岡 寛統
會務委員	上村 茂次郎 松本 謙
	山岸 勘太郎 加藤 智明
	松田 寛 清水 一郎
	梅松 外二
部長	江上 秀雄
委員	上原 菊之助 駒井 徳太郎
	岡本 勇 松山 康民
	長岡 寛統 山本 興吉
	木場 了本 松谷 金松
部長	大塚 岸三
委員	大藪 虎亮 高橋 禎二
	岩井 武雄 藤井 義夫
部長	篠原 一慶
委員	浦井 鏡一郎 赤井 直好
	栗原 廣道 木場 了本

部長	大河 良一 清水 宗次郎
委員	宮崎 重俊 藤井 信英
	弓 衛部
部長	鴻巣 盛廣
委員	瀬川 重禮 密田 良二
	加藤 信智 楠 正路
部長	劍道部
委員	岸 重次
	上原 菊之助 山本 興吉
	古賀 恒吉 端 覺松
	坂井 榮太郎
部長	柔道部
委員	石井 忠純
	長岡 寛統 榎本 竹治
	清野 耕治 淺水 成吉郎
	柏原 俊一
部長	野球部
委員	泉 瑛
	星野 信之 小原 度正
	山本 生三 山崎 増太郎
	手塚 信雄
部長	庭球部
委員	栗原 廣道
	市村 塘 金崎 顯彦
	福塚 藤次郎 後藤 卓美

部長	旅行部
委員	石井 忠純
	林 並木 神保 龍二
	手塚 雅彦 堀 尚雄
部長	漕艇部
委員	翠川 潤三
	長岡 寛統 川島 弘
	柴田 亮 武田 清一
部長	競技部
委員	松山 康民
	泉 瑛 望月 勝海
	大野 平作 高木 友雄
部長	共済部
委員	上原 菊之助
	山本 興吉 榎本 竹治
	古谷 健太郎 松本 慶昭
部長	水泳部
委員	市村 塘
	榎本 竹治 川島 弘
	手塚 雅彦
部長	籃球部
委員	山本 生三
	望月 勝海 松本 慶昭
	武田 清一

昭和四年度北辰會 委員

總務委員

文_三甲 米澤英雄 理_三丙 高野雄二
文_三乙 木邑公 理_三丁 田邊太郎
文_三乙 講演部
文_三乙 香取敬司 文_三乙 荒木甚之助
文_三甲 加藤正男 文_三丙 清水順吉
理_三丁 音樂部
理_三丁 竹田谷勳 文_三乙 森義範
理_三乙 東芳
文_三甲 乙村修 文_三乙 小島三德
文_三甲 米澤英雄 文_三丙 菅谷實
文_三甲 清水忠次郎 理_三丁 內田倫常
理_三丙 弓術部
理_三甲 中島清 文_三丙 澤崎綱之
理_三甲 林邦夫 理_三丙 生田經郎
理_三甲 劍道部
理_三甲 城野達郎 理_三丁 太田眞一
理_三丙 今泉勇 理_三甲 坪光松二
柔道部
文_三乙 森孝保 文_三丙 平岡學

理_三乙 高野務 理_三甲 小松實
文_三甲 關野佑一 文_三丙 白川正雄
文_三乙 淺井潔 文_三丙 田中則明
文_三乙 庭球部
文_三乙 日田彦太郎 理_三甲 淺見隆
文_三乙 渡邊政晴 理_三乙 大島好文
理_三丁 津野清也 理_三乙 北野三郎
理_三丁 今井九彌
漕艇部
理_三甲 陶山廣次 理_三丁 竹內實
理_三丁 丸安辰治 文_三丙 菊池弘
競技部
文_三丙 米谷正義 理_三丙 長尾捨一
理_三丁 玉村英夫 文_三丙 池田博二
理_三甲 吉田重治 理_三丁 辻益太郎
文_三乙 金居正一 理_三乙 河合俊雄
共濟部
文_三丙 中根宏一 文_三丙 竹內越夫
理_三甲 山縣幸雄 理_三丁 荒尾信俊
文_三甲 西村六平 文_三丙 北鐵雄
文_三乙 竹林八郎 文_三乙 木邑公
關谷要吉 文_三丙 梶村修一
水泳部

文_三甲 松波正治 理_三丁 中村壽一
文_三甲 加藤正男 理_三丁 佐藤進
文_三甲 籃球部
理_三甲 大竹三郎 理_三甲 鈴木文武
理_三甲 渡部時也 理_三丁 小西喜男
代議員
文_三甲 古川清一 文_三乙 板東勝二郎
文_三丙 岸本幸次 理_三甲 武部啓
理_三乙 井口清 理_三丙 小川忠明
理_三丁 淺山長一 文_三甲 荻野美丸
文_三乙 米永視榮 文_三丙 平岡學
理_三甲 谷昌衛 理_三乙 橫井孝一
理_三丙 吉田邦男 理_三丁 今井武博
文_三甲 保田源一 文_三乙 川本清太郎
理_三丙 小林武夫 理_三甲 河村貞晴
理_三乙 辰巳隆 理_三丙 深宮政範
理_三丁 吉田義雄

昭和三年度北辰會費收入支出決算

收入ノ部

科	目	豫算額	決算額	比増	減差
經常部	第一款 會費及入會金	七、八〇四・〇〇〇	七、八九二・〇〇〇	九五・〇〇〇	
	第一項 通常會員會費	六、八五九・〇〇〇	六、八五九・〇〇〇	九五・〇〇〇	
	第二項 入會金	一、一四〇・〇〇〇	一、一四〇・〇〇〇		
經常部	第二款 特別會員寄附金	七、一〇・〇〇〇	七、一〇・〇〇〇		
	第一項 普通寄附金	五、一〇・〇〇〇	五、一〇・〇〇〇		
	第二項 資金部寄附金	二、〇・〇〇〇	二、〇・〇〇〇		
	第三項 用途指定寄附金	一四〇・〇〇〇	一四〇・〇〇〇		
經常部	第三款 預金利子	一一〇・〇〇〇	一一〇・〇〇〇		
收入合計		八、六三四・〇〇〇	八、七九九・九四〇	一五・九四〇	

支出ノ部

科	目	決算額	豫算額	流用増額	流用減額	殘額
經常部	第一款 各部經常費	五、六二一・〇〇〇	五、五八二・七七〇	八七・二三〇	—	一〇三・四五〇

支 出 合 計	八、六四、〇〇〇	八、三三、〇〇〇			三六、一九〇
第四款 資金返還	四、〇〇〇	四、〇〇〇			
第三款 補助	二五、〇〇〇	二五、〇〇〇			
第二款 水泳講習會補助	五五、〇〇〇	五五、〇〇〇			
第八項 競技部費	八五、〇〇〇	八五、〇〇〇			
第七項 漕艇部費	一八、〇〇〇	一八、〇〇〇			
第六項 旅行部費	四五、〇〇〇	四四、八八〇			
第五項 野球部費	五三、〇〇〇	五三、〇〇〇			
第四項 庭球部費	六五、〇〇〇	六五、〇〇〇			
第三項 劍道部費	二八、〇〇〇	二八、〇〇〇			
第二項 弓術部費	一七、〇〇〇	一七、〇〇〇			
第一項 音樂部費	五九、〇〇〇	五九、〇〇〇			
臨時部					
第四款 運動會用具補充費	一四、〇〇〇	一四、〇〇〇			
第六項 艇庫改築積立金	五五、〇〇〇	五五、〇〇〇			
第五項 端艇建造積立金	二六、〇〇〇	二六、〇〇〇			
第四項 積立金	三五、〇〇〇	三五、〇〇〇			
第三項 庭球場改修積立金	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇			

第一項 講演部費	一二、〇〇〇	一二、七五〇			三、五〇
第二項 音樂部費	四、〇〇〇	四、〇〇〇			
第三項 雜誌部費	六五、〇〇〇	六五、〇〇〇			
第四項 弓術部費	三〇、〇〇〇	二〇、七五〇			
第五項 劍道部費	二七、〇〇〇	二七、三九〇			
第六項 柔道部費	二九、〇〇〇	三〇、〇六〇			
第七項 野球部費	五七、〇〇〇	五七、八九〇			
第八項 庭球部費	七九、〇〇〇	七八、八四〇			
第九項 旅行部費	三三、〇〇〇	三三、〇〇〇			
第十項 漕艇部費	四四、〇〇〇	四三、三三〇			
第十一項 競技部費	三三、〇〇〇	三三、一九〇			
第十二項 各部賞品費	二五、〇〇〇	二五、〇〇〇			
第十三項 特別大會費	三九、〇〇〇	三九、〇〇〇			
第十四項 春季運動會費	三三、〇〇〇	三三、〇〇〇			
第十五項 秋季運動會費	四〇、〇〇〇	四〇、〇〇〇			
第十六項 會務費	四〇、〇〇〇	四〇、〇〇〇			
第十七項 會費	四三、〇〇〇	四三、〇〇〇			
第十八項 積立金	一八、七五〇	一八、七五〇			
第十九項 永久資金積立金	八六、〇〇〇	八六、〇〇〇			
第二十項 野球場改修積立金	七〇、〇〇〇	七〇、〇〇〇			

意注

- 原稿は四白字又は二百字用紙に要すべし
- 作品の標題は作者の自由たるべし
- 締切期日は遵守すべし

昭和四年五月二十九日印刷
昭和四年六月一日發行
第百十五號

【品 賣 非】

編輯兼發行者 越川 與一 郎
石川縣金澤市廣域通三十三番地ノ一
印 刷 者 高 橋 覺 吉
石川縣金澤市高岡町九十番地
印 刷 所 明治印刷株式會社

發行所 第四高等學校北辰會